

## 九州大学百年史 第8巻 : 資料編 I

九州大学百年史編集委員会

<https://doi.org/10.15017/1448763>

---

出版情報 : 九州大学百年史. 8, 2014-05-30. Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

# 第五章 温泉治療学研究所の設置と創立二五周年

## 第一節 温泉治療学研究所の設置

### 二一〇 温泉治療学研究所官制

〔官報〕第一四五四号 一九三二（昭和六）年一月三日

朕温泉治療学研究所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

昭和六年十月三十一日

内閣総理大臣 男爵 若槻礼次郎

文部大臣 田中 隆三

勅令第二百六十六号

温泉治療学研究所官制

第一条 九州帝国大学ニ温泉治療学研究所ヲ附置ス

第二条 温泉治療学研究所ハ温泉治療学ニ関スル学理及応用ノ研究ヲ掌ル

第三条 温泉治療学研究所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

所員

助手

書記

薬剤手

看護長

第四条 所長ハ九州帝国大学教授ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス

所長ハ九州帝国大学総長ノ監督ノ下ニ於テ温泉治療学研究所ノ事務ヲ掌理ス

務ヲ掌理ス

第五条 所員ハ帝国大学ノ教授及助教授ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス

所員ハ所長ノ監督ノ下ニ於テ研究ヲ掌ル

第六条 助手ハ專任六人判任トス上司ノ指揮ヲ承ケ研究ニ従事ス

第七条 書記ハ專任二人判任トス上司ノ指揮ヲ承ケ事務ニ従事ス

第八条 薬剤手ハ專任二人判任トス上司ノ指揮ヲ承ケ調剤ニ従事ス

第九条 看護長ハ專任二人判任トス上司ノ指揮ヲ承ケ看護ニ関スル職務ニ服ス

職務ニ服ス

第十条 帝国大学教授ニシテ所長又ハ所員ニ補セラレタル者ニハ講座ヲ擔任セシメザルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リテ講座ヲ担任セザル教授及所員ニ補セラレ専ラ

事務ニ従事スル助教ハ通ジテ四人トシ所属帝国大学ノ定員外トス

ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

二二一 温泉治療学研究所長委任事項

(一九三二(昭和六)年二月二日制定)

温泉治療学研究所長委任事項

第一、判任官以下職員ノ分課ヲ命スルコト

第二、判任官以下職員ノ諸届ニ関スルコト

第三、俸給月額五拾円以下ノ職員ノ進退並五拾円以上ノ職員ノ解職

ニ関スルコト

但決行後即時開申スヘシ

第四、医員及調剤手ノ進退ニ関スルコト但決行後即時開申スヘシ

第五、職員以下ノ除服出仕ヲ命スルコト及暇願ニ関スルコト

第六、看護婦並備人ノ進退ニ関スルコト

第七、出勤簿整理ニ関スルコト

第八、宿直ニ関スルコト

第九、国有財産ノ管理ニ関スルコト

第十、物品ノ管理及出納命令ヲ為スコト

第十一、予算ノ範圍内ニ於テ一廉千円未満ノ金額ヲ以テ物品ヲ購入

シ若クハ備品ノ修理ヲ為スコト

第十二、一廉式百円以下ノ修繕及其材料購入ニ関スルコト但模様替

ハ此限ニアラス

第十三、価格百円以下ノ用品ヲ払下クルコト

第十四、価格式拾円以下ノ寄贈品ノ受理並之ニ対シ総長ノ名ヲ以テ

謝状ヲ発スルコト

(註)『九州帝国大学時報』第二四七号 一九三二(昭和六)年一月五日。

二二二 温泉治療学研究所処務細則

(一九三二(昭和六)年二月二日制定)

温泉治療学研究所処務細則

第一条 温泉治療学研究所ノ事務ハ事務係ニ於テ之ヲ処理ス

第二条 温泉治療学研究所事務係ニ事務主任ヲ置キ書記又ハ囑託員

ノ中ヨリ所長之ヲ命ス

事務主任ハ所長ノ指揮ヲ承ケ一切ノ事務ヲ掌理ス

第三条 事務係員ハ上司ノ指揮ヲ承ケ事務ヲ分担シ取扱事項ニ関シ

其ノ責ニ任ス

第四条 事務係ニ於テハ左ノ事務ヲ処理ス

庶務ニ属スル事項

一、職員ノ進退身分ニ関スルコト

二、所長ノ官印及所印ノ管守

三、公文書類ノ收受發送ニ関スルコト

四、統計報告ニ関スルコト

五、儀式ニ関スルコト

六、宿直ニ関スルコト

七、其ノ他会計ニ属セサルコト

会計ニ属スル事項

一、歳入歳出ノ予算決算ニ関スルコト

二、収入支出及現金ノ出納ニ関スルコト

三、国有財産ノ管理ニ関スルコト

四、物品ノ出納保管ニ関スルコト

五、物件ノ売買、貸借及修繕ニ関スルコト

六、所内ノ取締及非常警備ニ関スルコト

七、傭人ノ進退ニ関スルコト

第五条 本所ニ到達セル公文書ハ親展ヲ除クノ外之ヲ開封シ件名簿

ニ記載シ本書ニ番号年月日ヲ記入シ事務主任ノ検閲ヲ經テ各担当

者ニ配付シ受領印ヲ受クヘシ

第六条 親展ノ文書ハ親展書受付簿ニ記載シ宛名ノ者ニ交付シ受領

印ヲ受クヘシ

第七条 文書ノ配付ヲ受ケタル時ハ遅滞ナク処分案ヲ起草シ所長ノ

決裁ヲ請フヘシ

第八条 決裁ノ文書ニシテ他ニ發送スヘキモノハ文書担当者淨書発

送スヘシ

但計算書統計表又ハ図面ノ類ハ当該担当者ニ於テ淨書シ文書担当

者ニ廻付スヘシ

第九条 未完結ノ文書ハ文書担当者ヨリ之ヲ当該担当者ニ返付シ完

結ノ文書ハ之ヲ類別編纂シ保存スヘシ

第十条 文書ノ字体ハ総テ楷書又ハ行書ニテ認ムヘシ

第十一条 收受及發送スヘキ文書ハ左ノ符号番号ヲ記シテ之ヲ類別

スヘシ

温研職第 号

温研庶第 号

温研会第 号

第十二条 番号ハ符号別ニ之ヲ附シ毎年一月二起リ十二月二止ム

〔註〕『九州帝国大学時報』第二四七号 一九三二（昭和六）年一月五日。

### 二二三 温泉治療学研究所設置理由書

（『公文類聚』第五五編卷五 一九三二（昭和六）年）

一、温泉治療学研究所設置理由

温泉治療学力有効ナルノ点ニ就テハ、是ヲ經驗ニ徴スルモ、又  
輒近ニ於ル科学的立証ニ抛ルモ既ニ最モ明瞭ナル事実ニシテ是  
ヲ国民保健ノ為ニ科学的合理的ニ利用セシムルコトハ極メテ緊  
要ノ事項ニ属シ、既ニ泰西諸国ニ於テモ或ハ大学ニ講座ヲ拓キ、  
或ハ適地ニ研究所ヲ設ケ、或ハ又学会ヲ創立シ孜孜トシテ其ノ

利用、研究、開発ニ努力シツ、アルハ実ニ当然ノコトト思料セ

ラル。

温泉ヲ最有効ニ利用セン為ニハ先以テ温泉ノ本体ヲ理解シ其ノ作用ヲ明ニスルコトヲ要スルハ言フ迄モナシ温泉ハ地下深く産出シ地上ト頗ル其ノ氣象状態ヲ異ニセル場所ニ創造セラルルコトハ蓋シ温泉ニ特殊ノ性質ヲ附与シ、其ノ特殊生物学的作用ヲ發揮セシムル真因ヲナスモノニシテ、是ヲ単ニ地上ニ於テノミ既往習得セル物理化学ヲ以テシテハ理解ニ苦シムノ事矣ニ逢着スルコト多シ。故ニ本研究ハ侮ルヘカラサル難事業ニ属シ、決シテ是ヲ学者片手間ノ閑事業ニ委スヘキモノニ非ス。宜敷専門学者ノ集中セル勢力ト特殊の研究トニ依リテ始メテ其ノ緒ヲ拓クヲ得ヘキノミ。

我國ハ由来温泉ノ量及質ニ於テ天下ニ冠絶スルノ天恵ヲ有シ其ノ温泉療養者ノ数逐年増加スルノ状況ニ在リト雖モ不幸ニシテ本邦ニ於テハ一ノ温泉研究所ヲモ有セサルヲ以テ、是等多數ノ療養者ニ対シ其ノ効果ヲ全カラシムヘキ研究、指導者ノ機關皆無ナルハ極メテ遺憾トスルコトコトニシテ是ヲ東西学界ノ現況ヨリ見ルモ將又我國国民保健ノ實際ヨリ見ルモ速力ニ温泉研究ノ歩ヲ進メテ其ノ最善ナル利用法ヲ考究スルハ極メテ急務ナルヲ信ス

二、温泉治療学研究所ノ事業

事業ノ目標ハ温泉ノ研究及利用ニ関スル各項目ニ渉ルヲ以テ甚

多數ナリト雖其ノ主ナルモノヲ列記スレハ

(一) 温泉ノ生物学的作用殊ニ人体ニ及ホス作用並其ノ療養の素因ニ関スル各種ノ実験研究

(二) 各種温泉ノ適応症ヲ決定シ且最善ナル応用法ノ考究

(三) 温泉療養ニ関スル科学的研究ノ促進及指導

(四) 各種温泉ノ分析、分類並其ノ特性ノ検出

(五) 温泉治療法ノ実習

(六) 其ノ他必要事項

以上各項目ノ必要ヲ満サン為基礎、臨床各医学ノ多方面ニ涉リ各々専門家ニ依リテ専門事項ノ考究ヲ行ヒ目的ノ貫徹ヲ期セントス

三、温泉治療学研究所ヲ別府ニ設クル理由

温泉ニ関スル實際研究ハ温泉湧出地ニ非レハ是力完成ヲ期シ難シ、故ニ此種ノ研究所ハ必スヤ是ヲ温泉地ニ設立セサルヘカラス。

本邦ニ於ケル各地ノ温泉場中温泉ノ種類及湧出量ニ於テ別府地方ハ斷然其ノ主位ヲ占メ其他交通ノ至便、氣候ノ温和、空氣清澄、物質ノ潤沢ナル等研究ノ対象及材料ニ於テ最モ天恵ニ富メル地ナレハナリ。

四、温泉治療学研究所設置地域

大分県速見郡朝日村大字鶴見字鶴見原 四 五四八ノ二、

第三編 九州帝国大学の拡充

第五部	第四部	第三部	第二部	第一部	部別	教授	助教	助手	書記	薬剤手	看護長
—				—	専任			二			
	—	—	—		兼任			—			
	—		—		専任			—			
—		—		—	兼任			—			
二	—	—	—	二	助手						
					書記						
					薬剤手						
					看護長						

六、職員配置表

基礎学

第五部

皮膚科、泌尿器科

第四部

婦人科

第三部

外科、整形外科

第二部

内科、小児科

第一部

五、温泉治療学研究所ノ部別

同 県同 郡石垣村大字南石垣字鶴見原 一、五一八ノ二

四、五四六ノ二三

共通	計
	二
	三
	二
	三
	七
	三
	二
	二

(一) 温泉治療学研究所ヲ九州帝国大学ニ附置スル理由

温泉治療学研究所ハ斯学ニ関スル深遠ナル研究ヲ為スヲ目的トシ  
而テ此ノ研究ハ温泉療法學、温泉生理學、氣候療法學、温泉學ヲ  
主要ナル対象トスルモノナルヲ以テ帝国大学ニ於ケル医学部其他  
ノ研究ト密接ナル關係ヲ保チ彼是相提携シテ之ヲ行フコトニ依リ  
テ始メテ十分ナル効果ヲ揚ケ得ヘキモノナルヲ以テ単独ノ研究所  
トセスシテ之ヲ九州帝国大学ニ附置スルヲ適當トス(同大学ニハ  
未ダ理学部ノ開設ナシト雖モ農学部工学部ニハ理学ニ属スル講座  
相当有之温泉治療学研究所ニ於ケル基礎学的研究ヲ扶クルニ足ル  
ヘシ)伝染病研究所力東京帝国大学ニ附置セラル、ニ至リシモ、医  
学上ノ研究ヲ掌ル所ノ東京帝国大学ト十分ナル連絡ヲ保チ互ニ相  
扶ケテ研究上ノ進歩ヲ計ルヲ適當トセラレタル力故ニシテ其他  
航空研究所、金属材料研究所、地震研究所及化学研究所ノ如キ何  
レモ之ヲ帝国大学ニ附置スルノ制ニ依レルカ如キ皆同一ノ理由ニ  
基クモノナリ

(二) 温泉治療学研究所ニ於テ所員制ニ依レル理由

同研究所力九州帝国大学ニ附置セラル、以上ハ九州帝国大学ニ講  
座ヲ担任セスシテ専ラ研究ヲ司ル所ノ所謂リサーチプロフェツサ

一 (research professor) 及補助者ヲ置キ之ヲシテ温泉治療学研究  
所ノ専任所員トシテ研究ノコトニ当ラシムルヲ適當トス如此ク専  
任所員ハ大学教授及補助者ヲ以テ之ニ補スルコトトシ彼ノ講座ヲ  
担任スル一般ノ教授及補助者ト同一ノ待遇ヲナシ以テ旺盛ナル研  
究心ヲ有スル優秀ノ学者ヲ誘致スルコトハ研究ノ効果ヲ挙クルカ  
為ニ絶対ニ必要ニシテ専任所員ヲ技師トスル時ハ待遇ノ關係上其  
他ヨリ到底有力ナル学者ヲ迎フルヲ得スシテ研究所設置ノ目的ヲ  
達成スルヲ得サルハ明ナリ尚同研究所ハ温泉治療ニ関スル学理及  
応用ノ研究ヲ掌ルモノニシテ例ヘバ癩療養所ノ如ク単ニ患者ノ救  
護及療養ニ関スルコトヲ掌ルモノト異ルカ故ニ医官ノ制ニ依ルコ  
トヲ得ズ之ヲ要スルニ所員ハ必ず大学教授又ハ助教教授ノ中ヨリ之  
ニ補スルコトヲ要スルモノナリ

## 第二節 創立二五周年

### 二一四 創立二十五周年記念式典概要

《創立二十五周年記念式書類》

#### 記念式典概要

昭和十一年十一月七日午前十時より秋雨降りつゞく天幕内に於て本  
学創立二十五周年記念式典は挙げられたり。今其の概要を摘録して  
後日の参考に資せんとす。

抑々明治四十四年三月本学の一前身たる京都帝国大学福岡医科大学  
が、新に設置せられたる工科大学と共に九州帝国大学として北九州  
の一角福岡に創建せられし以来、春風秋雨将さに二十五星霜を迎へ  
んとするや、何等か之を記念して既往を偲ぶと共に将来を祝福せん  
との議早くも昭和十年初頭の頃より人々の口の端に上れり。然るに  
其機運次第に熟して遂に昭和十年九月二十三日総長、庶務課長及四  
学部長の会合となり、愈々昭和十一年五月十一日を卜して記念式を  
行ふ事及之が準備の爲め学部長を中心としたる準備委員を組織する  
ことゝなれり。

越えて昭和十一年一月十七日第二回準備委員会に於て大要左の如き  
要項の決定を見たり。

式次第 (工学部運動場大テント内)

- 一、開式（五月十一日午前十時）
- 一、国歌合唱（楽隊ヲ招聘ス）  
（マイク・ロホン設備）
- 一、総長勅語奉読
- 一、総長式辞
- 一、勤統者表彰
- 一、文部大臣祝辞
- 一、来賓祝辞（帝大総長、知事、市長、町長）
- 一、祝電披露
- 一、卒業生総代祝辞
- 一、学生総代祝辞
- 一、閉式（正午頃）
- 来賓
- 一、本省 局長以上並関係局課長
- 一、帝大総長、各学部長、事務官
- 一、各直轄学校長
- 一、公私立大学総長又ハ学長
- 一、本学名誉教授
- 一、本学創設功勞者
- 一、奨学資金寄附者
- 一、九州、山口貴衆両院議員
- 一、九州、山口所在各官衙幹部
- 一、市及隣接町村有力者
- 一、関係新聞社長及記者
- 一、卒業生
- 饗宴
- 一、日時 記念式後
- 二、場所 工学部運動場テント内
- 三、立食 西洋料理（二人一皿盛）二円程度  
    外ニ清酒、ビール、タンサン、サイダー
- 一、出席者 来賓、総長、以下接待員各学部高等官十五名宛外事  
    務関係
- 園遊会
- 一、日時 五月十一日 記念式後
- 二、場所 各学部別ニ設備ス（本部ハ工学部ニ  
    図書館ハ法文学部ニ併合）可成  
    合同シテ行フ
- 三、料理 折詰弁当、鮪、汁粉、オデン  
    外ニ清酒、ビール、サイダー
- 四、出席者 職員、卒業生、学生
- 五、園遊会券 予メ適宜ノ方法ニ依リ配布ス
- 六、経費 各学部ノ主催トシ本部ヨリ補助ス一人当五〇銭  
    外ニ傭人（雇員看護婦ヲ含ム）一人ニ付三〇銭ノ酒肴料支給
- 学内開放



一、日 時 五月十二日 自午前九時  
至午後四時

一、開放場所 各学部

記念講演

一、日 時 五月十二日 午後一時開始

一、会 場 工学部大講堂

一、講 師 各学部一人宛

記念品

一、博多織風呂敷 来賓、高等官並講師ニ頒ツ

一、繪葉書 (本学代表建物撮影)

来賓、職員、卒業生、学生、但シ学生ニ対シテ

ハ式当日以後当該学部事務室ニ於テ交付ス

勤続職員表彰

一、判任官以下ニシテ勤続二十五年以上ノ者及二十年以上ノ者トス

然るに中途臨時議会等の関係上延期の止むなきに至り、遂に昭和十

一年七月二十八日第三回準備委員会に於て前回決定事項に少しく修

正を加へ左の如く決定せり

創立二十五周年記念式祝典ニ関スル打合会要項

式 次 第 (工学部運動場大テント内)

一、開 式 (十一月七日土曜日午前十時)

一、国歌合唱 (楽隊ヲ招聘ス  
(マイクrohホン設備))

一、総長勅語奉読

一、大学令第一条朗読

一、総長式辞

一、文部大臣祝辞

一、来賓祝辞 (帝大総長、知事、市長、町長)

一、祝電披露

一、卒業生総代祝辞

一、学生総代祝辞

一、勤続者表彰 (判任官以下)

一、閉 式 (正 午 頃)

式 参 列 者

一、来 賓

一、本学名誉教授

一、本学職員

一、卒 業 生

一、学生及生徒

来 賓

一、本省 局長以上並関係局課長

一、帝大総長、各学部長、事務官

一、官公私立大学総長又ハ学長

一、直轄学校長

一、福岡県下私立専門学校長

- 一、本学功労者
- 一、奨学資金寄附者
- 一、九州、山口貴衆両院議員
- 一、九州、山口所在各官衛長
- 一、市及隣接町村有力者（各学部長ヨリ推薦シタル者）  
及本部ニテ詮衡シタル者
- 一、關係新聞社長及記者
- 饗宴
- 一、日時 記念式後
- 二、場所 工学部運動場テント内
- 三、立食 西洋料理（一人一皿盛）二円程度  
外ニ清酒、ビール、タンサン、サイダー
- 四、出席者 来賓、名誉教授、総長、以下接待員各学部高等官十  
五名宛外事務關係
- 園遊会
- 一、日時 十一月七日記念式後
- 二、場所 各学部別ニ設置ス（本部ハ工学部ニ  
圖書館ハ法文学部ニ併合）可成  
合同シテ行フ
- 三、料理 折詰弁当、鮭、汁粉、オデン  
外ニ清酒、ビール、サイダー
- 四、出席者 職員、卒業生、学生
- 五、園遊会券 予メ適宜ノ方法ニ依リ配布ス

- 六、經費 各学部ノ主權トシ本部ヨリ補助ス一人当五〇銭  
外ニ傭人（雇員看護婦ヲ含ム）一人ニ付三〇銭ノ酒肴料支給
- 学内開放
- 一、日時 十一月七日 自午後一時 至午後四時 来賓  
十一月八日 自午前九時 至午後四時 一般
- 一、開放場所 各学部
- 記念講演
- 一、日時 十一月八日 午後一時開始
- 一、会場 工学部大講堂
- 一、演題 二十五年前ト今日トノ  
医学  
工学  
農学  
文化科学
- 一、講師 各学部一人宛
- 記念品
- 一、博多織風呂敷 来賓、名誉教授、高等官並講師ニ頒ツ
- 一、絵葉書（本学代表建物撮影）  
来賓、職員、卒業生、学生、但シ学生ニ対シテ  
ハ式当日以後当該学部事務室ニ於テ交付ス
- 勤続職員表彰
- 一、判任官以下ニシテ勤続二十五年以上ノ者及二十年以上ノ者トス

其後数回の小準備部会等を経て準備次第に整ひ其当日を待つ。然るに愈十一月七日となるや殆んど一ヶ月余の快晴続きなりし秋天何にか感じけん、早朝より秋雨蕭々と降り出で、又止むべくも見えず。

定刻十時を過ぐる二十分、学生、卒業生、職員及来賓等着席、茲に栄ある記念式の幕は開かれたり。会衆一同国歌合唱に始まり、満田総長代理の勅語奉読、同大学令第一条朗読及式辞あり。尋いで文部大臣(河原次官代読)、帝大総長総代東大総長(三浦東大教授代読)、福岡県知事(辻学務部長代読)、福岡市長、箱崎町長の祝辞、祝電披露、卒業生総代(金子廉次郎教授)、学生総代(工学部機械工科学科学生)の祝辞あり。最後に左記永年勤続の人々を表彰し、満田総長代理より各総代に夫々表彰状及金巻封を贈呈し式を了れり。

#### 1、二十五年以上勤続者

松木虎三郎、栗原武晃、井上治雄、三原辰生、新妻錦、加賀田チモト、村井龍筭、安武輪三郎、小石原来吉、磯部熊太郎、西村虎吉、柴田勝次郎、池田藏次郎

#### 2、二十年以上勤続者

長澤孝太郎、四宮述雄、庄野養助、稲永可也、松尾誓行、阿部好一、勝本治三郎、江藤サク、岩城巍、澤田肇、柴田一祐、小川武男、荒金友藏、安武仁三郎、白水題次郎、藤孫次郎、川野袈裟太郎

式後來賓(約二百余名)及本学接待委員(各学部より十五名宛)は

饗宴場に入り祝宴を開く。祝酒のまわるに従ひ歓談頓にあがり、和氣靄々たるものあり。高岡北海道総長の発声にて本学の万歳を三唱し宴を閉ぢたり。時に正午過ぐる三十分なり。秋雨尚未だ止まず。接待委員を除きたる本学職員及学生並に卒業生は各学部にて開催の宴遊会に殺到し、各学部共非常の混雑を来せり。降りしきる秋雨も物かほと余興の催等あり。之亦歓声裡に薄暮散会せり。

之より先所在地箱崎町にありては此意義ある二十五周年を祝福せんとの熱意に燃え、全町装飾裡に国旗を掲揚し、尚秋雨降りしきる最中をも厭はず小学校生徒並に町民約二千余の旗行列あり。夜に入りては更に提灯行列を行ひ、一層の景気を添へられたるは本学の感謝に堪えざる所なり。

#### 二、慰霊祭

二十五周年記念式挙行を機とし、其前日たる十一月六日午前十時より本学創設以来の功労者及在職中の職員物故者並学生卒業生の物故者七百余名の霊を祭る式は神式にて執行、出席の遺族には粗菓を呈したり。

(註) 原本に句読点追加。

二一五 慰靈祭祭文

〔創立二十五周年記念式書類〕

祭文

維時昭和十一年十一月六日九州帝国大学総長高山正雄恭シク清酌庶羞ノ奠ヲ供ヘテ故本学総長男爵山川健次郎閣下外職員、卒業生、学生等六百九十九名ノ英靈ヲ祭ル。

回顧スレバ本学ハ明治四十三年創立以來年ト共ニ進展ノ一途ヲ辿リ、学運隆々今ヤ西日本最大ノ学術ノ殿堂トシテ声誉江湖ニ噴々タルニ至レリ。之レ乃チ教職員諸氏以下ノ拮据精勵ト卒業生諸氏ノ協力及ビ在学生諸君ノ真摯ナル研鑽トニ依ルト雖モ他面亦在天諸靈ノ冥護ニ頼ルコト多大ナルモノアルヲ信ズ。

英靈各位ノ中ニハ鞠躬尽瘁、只管本学ノ隆盛ニ力ヲ致シタルアリ、学術ノ研鑽ト後進ノ誘掖トヲ以テ天職トシタルアリ、或ハ学了リテ国家社会ノ為ニ奉公ノ赤誠ヲ致シタルアリ、或ハ又有為ノ資可惜驥足ヲ伸スニ由ナク業半ニシテ夭折シタルアリ。其為ス所種々異ナレリト雖モ各其本分ヲ守リ、本学並ニ国家ニ尽シタル功績ニ至リテハ皆其帰趨ヲ一ニシ、其偉功ハ千歳ニ亘リテ埋レズ、其芳名ハ本学ノ存続ト共ニ永劫滅セザラン。

今正ニ本学創立二十五周年ヲ迎ヘ其隆祥ヲ記念スルニ当リ、幽明遠ク境ヲ異ニシ各位ト此歡ヲ俱ニスルヲ得ザルハ吾人ノ最モ遺憾トスル所ニシテ悲喜交々秋風一入身ニ泌ミテ感慨言フベカラズ。嗚呼。

茲ニ余等関係者一同祭ノ場ニ額キテ恭シク各位ノ英靈ヲ招ジ、其崇高ナル人格ト不滅ノ功績トヲ頌シテ追念敬慕ノ情ヲ披瀝シ、以テ聊カ諸靈ヲ慰ムル所アラントス。希クハ来リ饗ケヨ。

昭和十一年十一月六日

九州帝国大学総長 高山正雄

二一六 九州帝国大学総長高山正雄式辞

〔創立二十五周年記念式書類〕

式辞

九州帝国大学創立セラレテヨリ正ニ二十五周年、茲ニ其ノ記念式ヲ举行スルニ方リ、朝野諸名流ノ光臨ヲ忝ウシタルハ本学ノ深ク欣幸トスル所ナリ。

回顧スレハ本学ノ創設セラレタルハ恰モ日露戦役ノ大捷ヲ博シ、国運ノ隆昌頓ニ著シキモノアルノ秋ニ当リ、時代ハ実ニ教養アル指導人物ノ輩出ト最高学術ノ応用トヲ急トシタリ。国家ハ乃チ時勢ノ要求ニ応スルカ為、本学従来ノ単科制ヲ改メテ綜合制ノ基礎ヲ確立シ、本学ヲシテ邦家興隆ノ一象徴タルニ至ラシメタリ。爾来組織施設ヲ整ヘ銳意励精、幸ニ綜合制ノ実績ヲ挙クルコトヲ得タルハ本学ノ深ク慶ヒトスル所ナリ。

惟フニ本学ハ医科大学ヲ基礎トシテ、夙ニ工科大学ヲ開設シ、尋テ単科大学ヲ改メテ綜合制ヲ採リ、更ニ農学部ヲ設ケ法文学部ヲ置

キテ漸次ニ体制ヲ具へ、今ヤ理学部創設ノ時到ルヲ待ツノミ。此ノ如クニシテ現ニ体制内容共ニ綜合大学タルノ実アルヲ致セルハ、既往ニ二十五年ノ間本学歴代ノ当事者カ心ヲ一ニシ力ヲ戮ハセ、全学ヲ挙ケテ一意ノ力完璧ヲ期シタル努力ノ結晶ニ外ナラス。因テ此ニ深甚ナル敬意ヲ表ス。本学ノ為創設以來特ニ眷護ヲ加ヘラレタル有力者各位ノ力固ヨリ其ノ礎石ヲ成セルハ是レ亦感謝ニ勝ヘサル所ナリ。

何ノ幸カ大正五年十一月二ハ

大正天皇親シク本学ニ行幸アラセラレ、同九年四月二ハ

天皇陛下猶東宮ニ在マシテ行啓ヲ賜ハリ、同十一年三月二ハ 皇太后陛下時ノ皇后陛下ニ在マシテ行啓アラセラレ、同十四年二ハ 秩

父宮殿下亦台臨アラセラル。本学ノ光荣何物カ焉ニ尚ヘン。是レ本学ノ為ニ厚誼ヲ寄セラルル各位ノ共ニ其ノ慶ヒヲ同シクセラルル所ナリト信ス。

今ヤ曾テ国家興隆ノ際ヲ以テ創設セラレシ本学ハ、正ニ国家多難ノ秋ヲ以テ斯ノ記念スヘキ佳辰ヲ迎ヘタリ。是レ肇世奇シク非常ノ局面ニ処シテ各種實際問題ノ解決ニ腐心シ、大学ニ於ケル研鑽ト教養トハ広ク中外ノ翕望ヲ萃ムルノ時ナリ。庶幾クハ本学關係ノ各位カ今後一層ノ庇護ト激励トヲ加ヘラレ、職員各位並ニ学生諸子皆齊シク協力同心共ニ研学成器ノ功ヲ積み、以テ本学本来ノ精神ヲ貫徹スルニ愈々邁前セラルルアラントヲ。

乃チ挙式ニ方リ一言所懐ヲ披瀝シ以テ式辞ト為ス。

昭和十一年十一月七日

九州帝国大学総長正三位勲二等医学博士高山正雄

〔註〕 原本句読点なし。

## 二二七 文部大臣平生飢三郎外祝辞

〔創立二十五周年記念式書類〕

茲ニ九州帝国大学創立二十五周年記念式ノ举行セラル、ニ当リ、所懐ノ一端ヲ陳ベテ祝賀ノ意ヲ表スルノ機会ヲ得マシタコトハ私ノ欣幸トスルトコロデアリマス。

顧ルニ明治四十三年本学ノ創立セラレテ以来、医学部ニ加ヘテ工学部、農学部、法文学部ガ逐次ニ増設セラレ、又有力ナル研究所ノ附設ヲモ見、今ヤ綜合大学ノ組織ト内容トハ共ニ整備スルニ至リ、且又研究ニ教育ニ多大ナル実績ヲ挙げテ有ナル人材ヲ輩出セシメ、国運ノ隆盛、人類ノ福祉ニ寄与シタルトコロ大ナルモノガアリマス。コレ素ヨリ歴代当事者ノ董督ト教授並ニ学生ノ協力トニ由ルモノデアリマシテ、独リ本学ノ誇タルニ止マラズ邦家ノ為深く慶賀ニ堪ヘザルトコロデアリマス。

大学ハ學術ノ蘊奥ヲ究ムルトコロデアリマスガ、単ナル知識真理ノ伝達機関タルニ止マラズ、マタ技術家ノ養成所タルニ甘ンズルコトナク、学徒ヲシテ十分ナル学的研究ニ精進セシムルト共ニ、又各種學問ノ国民生活ニ於ケル職能ヲ明確ナラシメテ、各方面ニ於ケル国

家有用ノ材ヲ育成スルトコロニ其ノ真ノ使命ガアルノデアリマシテ、殊ニ綜合大学ノ制ハ、人文科学、自然科学ノ各学科ガ其ノ専門ニ徹スルト共ニ、又一大体系ヲ成シツ、互ニ補益シテ、ヨク大学教育本來ノ機能ヲ發揮セシムルトコロニ其ノ特色ヲ見ルノデアリマス。文化ノ進展ト共ニ学的研究ニ俟ツモノ愈々多キヲ加へ、各方面ヨリ真ニ教養アル人士ノ要求セラルルハ改メテ言フヲ要セザルトコロデアリマス。現下ノ情勢ヲ顧ルニ、内外共ニ多事多端デアリマシテ、斯カル時代ニ於テコソ智ト徳トノ源泉タル大学ノ任務タルヤ非常ニ重大ナルモノガアルト考ヘラルルノデアリマスカラ、庶幾クハ本学ノ職員各位並ニ学生諸子、皆能ク本学ノ使命ト任務トヲ自覚セラレ、本学ノ光荣アル歴史ニ鑑ミテ各ソノ道ニ勇往邁進セラレムコトヲ至囑ニ堪ヘヌ次第デアリマス。

昭和十一年十一月七日

文部大臣 平生 夙三郎

本日九州帝国大学カ創立二十五周年記念式ヲ举行セラル、ニ当リ、一言祝辞ヲ述フル機会ヲ得タルハ予ノ欣幸トスルトコロナリ。

惟フニ吾カ邦ノ文化的地位ハ過去半世紀ニ於テ急速ノ向上躍進ヲ遂ケ、而シテ此ノ間大学ハ吾カ邦文化ノ一大源泉トシテ国運ノ進展ニ寄与貢獻セルトコロ多ナリシハ、何人モ異論無カルヘシ。明治十九年帝国大学令公布セラレテ以来、文運益々隆昌ニ赴キ、現今官公

私立大学ノ数実ニ四十有九ヲ算シ、等シク大学令第一条ニ示サル、目的ノ達成ニ一層努力邁進シツ、アルハ誠ニ聖代ノ盛事ナリト謂フヘシ。抑々大学カ学問ノ蘊奥ヲ攻究スルト共ニ、時勢ニ伴ツテ向上スル国民生活トノ關係ヲ緊密ニシ、又学問ノ発達ニ從ツテ分化セントスル研究ノ綜合的成果ニ着眼スルトハ、現時ニ於テ更ニ切実ナルモノアリ。貴大学ハ明治三十六年ニ設置セラレタル京都帝国大学福岡医科大学ノ素地ノ上ニ、明治四十四年朝野ノ多大ナル期待ヲ以テ開設セラレ、近代文明輸入ノ門戸トシテ我カ文化史上ニ輝ク九州ノ地ニ在ツテ、克ク大学ノ使命ニ精進セラレ、制度内容ヲ充実シ来リ、諸般ノ研究設備ト其ノ業績ヲ以テ奮ニ我カ邦ノミナラス広ク世界ノ学界ニ裨益シ、人類ノ福祉増進ニ貢献スルト共ニ、既ニ五千余名ノ有為ノ人材ヲ社会ニ送り、是等ノ卒業生諸君ハ執レモ各方面ニ於ケル指導ノ位置ニ在ツテ活躍セラレツ、アルヲ見ルハ、誠ニ慶賀ニ堪ヘサルナリ。之レ偏ニ歴代総長以下職員各位ノ苦辛經營ノ賜ニ外ナラス。更ニ特筆スヘキハ昭和六年貴大学ニ附置セラレタル温泉治療学研究所ニシテ、温泉国ト称セラル、我国ニ於テ温泉治療ニ関スル学問的研究ハ本所ヲ以テ嚆矢トス。其ノ設置ハ寧ろ遅キニ過クルカ如キモ、貴大学カ此ノ方面ニ先鞭ヲ着ケラレタルハ学界ノ慶事ニシテ、其ノ業績ノ期シテ俟ツヘキモノアリ。予ハ本日ノ盛典ニ際シ貴大学ノ四半世紀ニ亘ル光荣アル歴史ヲ回顧シ、将来ニ於ケル一層ノ發展ヲ祈ル。

昭和十一年十一月七日

東京帝国大学総長 長 興 又 郎

祝 辞

本日茲ニ九州帝国大学創立二十五周年記念ノ式典ヲ挙ゲラルルニ当リ、一言祝辞ヲ述ブルコトヲ得タルハ最モ光榮トスル所ナリ。

顧ミルニ、京都帝国大学ノ一分科トシテ福岡医科大学ノ設置セラレシハ実ニ明治三十六年ニシテ、日露風雲漸ク急ナラントスル時ナリキ。之レ即チ本学ノ素地ニシテ、戦後国威頓ニ揚リ、国運ノ伸張ハ文化ノ向上ヲ促進シ、大学増設ノ要切ナルモノアリ。明治四十三年遂ニ九州帝国大学ノ創設ヲ見タリ。爾来二十有五年、其ノ間 大正天皇ノ行幸ヲ仰ギ、或ハ行啓、台臨ヲ仰グノ光榮ニ浴シ、俊秀頻リニ集マリ、研学大イニ奮ヒ、内容ノ充実ハ規模ノ拡大ヲ伴ヒ、今ヤ医、工、農、法文科ノ四学部ヲ擁スル蔚然タル綜合大学タリ。誠ニ盛ナリト謂フベシ。

本学ノ潑刺タル学風ト清新真摯ナル研究トハ夙ニ学界ノ雄トスル所ニシテ、今ヤ卒業生ヲ出スコト將ニ七千ニ垂ントシ、是等ノ人士ハ社会ノ各方面ニ於テ或ハ學術ニ或ハ実務ニ活躍シ、二千ノ在学生亦孜々トシテ研鑽ニカム。邦家ノ為欣喜ニ堪ヘザルナリ。

今ヤ我邦内外多事ニシテ、文化ノ独立ト其ノ進展トハ蓋シ最モ緊要ノ事ニ属ス、此ノ秋ニ当リ国家須要ノ學術ノ蘊奧ヲ極メ、邦家有為

ノ人材ノ完成ヲ目的トスル大学教育ニ期待スルコト甚ダ大ナルモノアリ。本日ノ盛典ニ列シ祝意ヲ表スルト共ニ、深く邦家ノ前途ニ鑑ミ本大学ニ囑望スルコト甚大ナルモノアルヲ思フ。一言所懐ヲ述ヘテ祝辞トナス。

昭和十一年十一月七日

福岡県知事從四位勲二等 畑 山 四男 美

祝 辞

西日本ノ學術殿堂トシテ斯界ノ王座ヲ誇ラル、九州帝国大学ガ春秋爰ニ四半世紀、本日ヲトシテ光輝アル二十五周年記念式ヲ舉行セラ、ニ方リ、市民ヲ代表シ我等ノ九大ノ榮光ヲ讃ヘ、心ヨリ学園ノ幸ヲ祝福スルハ洵ニ欣榮、真ニ慶祝ニ堪ヘザル所ナリ。

我等ハ九大ヲ擁シテ学都福岡ノ自負ヲ有シ、居常毎ニ九大讚美ノお国自慢ヲ持チ、わしが国さノ心境ハ内ニ外ニ感慨無量ノ九大史ヲ綴リ、明治三十六年三月、福岡医科大学ノ設立前後ヨリ、之ヲ市宝トシテ敬愛スルコト甚ダシク、同四十三年一月京都帝大ヨリ分離シテ待望久シキ綜合大学ヲ設立セラル、ヤ特ニ独立九大ノ誉レヲ誇リ、西日本ノ最高学府トシテ全日本ノ一新權威ヲ形成シ、山川、眞野、大工原、松浦、高山ノ名総長ガ歴代相繼ギテ九大ノ声価ヲ高メラレ、特色アル九大タイプ、異彩アル九大魂ノ確立ハ勿論、独自ノ学風、一貫ノ校格日二月ニ出色ヲ加ヘ、学界ノ信望係ツテ九州帝大ニ集ル

時、茲ニ輝キアル二十五周年ヲ迎へ、朝野ノ貴紳学界ノ巨匠ヲ一堂ニ飾リ、晴ノ記念式典ヲ盛行セラル、コトハ、教育日本ノ一大慶事トシテ衷心ノ喜悅ヲ禁ズル能ハズ、我等ノ九大ヲ聖壇トシテ内ニ聴キ外ニ勉メ、以テ学都ノ矜持ヲ傷ケザランコトヲ庶幾フ。

今ヤ時局多難ニシテ学界亦多端ヲ極ムル秋、願クバ教育刷新ノ国策ニ則リ、躍進スル科学日本ノ指導原理ト、鬱勃タル新興日本ノ指導精神ヲ明示サレ、更ニ理学部ヲ増設シテ綜合大学ノ機構ヲ高メ、日本ノ九大トシテ、否世界ノ九大トシテ活躍サレ、名実共ニ學術報國ノ大業ヲ全フセラレ度、時ハ靈秋、処ハ千代ノ松原、乞フ我等ノ九大ニヨリ幸アリ、ヨリ榮光アラントヲ切望シ、一言錦繡ノ頌ヲ盛ツテ祝辞トス。

昭和十一年十一月七日

福岡市長 久 世 庸 夫

祝 辞

菊花床シキ本日ノ佳辰ヲトシ、茲ニ九州帝国大学創立第二十五周年ノ盛大ナル記念祝典ヲ举行セラル、ニ當リ、所在地タル箱崎町々民ヲ代表シ、茲ニ祝辞ヲ述フルヲ得ルハ不肖ノ最モ欣幸トスル所ナリ。

本大学創設ノ往時ヲ顧ルニ、明治三十七八年戦役後我が国運ノ飛躍ハ急潮ノ如ク、国民生活ノ向上ハ内治外交所有方面ノ革進ヲ促シタ

ル時ニシテ、我が北九州ノ地又産業經濟ノ開發誠ニ目覚シキモノアリ。當時京都帝国大学ノ一分科タル医科大学ノミヲ有スル我が福岡トシテ、工科大学ノ急設ヲ要望セラレシハ又宜ナリト謂フヘシ。此唱道ハ明治四十三年遂ニ実現セラレ、尋デ本九州帝国大学ノ創立ヲ見ルニ至レリ。

箱崎町ハ爾來星霜二十五年、大学所在地タル誇リヲ頭上ニ戴キ、益々町政ヲ新ニシ、今日ノ繁榮ヲ見ルニ至リシハ、一ツニ本大学ノ啓発ニ因ルモノニシテ、本町ノ感激措ク能ハザル所ナリ。

本大学ハ由来法文学部、農学部等引續キテ増設アリ、綜合大学トシテ愈々其機能ヲ發輝、幾多ノ人材ヲ輩出シテ国家ニ貢獻セラレタルハ誠ニ欣幸ニ堪ヘサル所ナリ。

而シテ今ヤ我が国運ノ進展ハ決河ノ如ク、国ノ内外ヲ問ハズ幾多逸材ノ士ヲ待ツ事甚ダ急ナリ。希クハ此ノ非常時ニ際シ愈々榮譽アル貴大学ノ本質ヲ具現セラレ、以テ国家ノ期待ニ沿ハレン事ヲ。

聊力蕪辞ヲ述ベテ祝辞トス。

昭和十一年十一月七日

箱崎町長 山 崎 美 太 郎

祝 辞

本日茲ニ九州帝国大学創立二十五周年記念祝典ヲ举行セラル、ニ當リ、不肖職ヲ本学ニ奉ジ此ノ盛典ニ列リ、且ツ卒業生トシテ祝辞ヲ



述フルヲ得ルハ誠ニ光榮至極ニシテ、且ツ欣快措ク能ハサル所ナリ。顧レバ本学ノ創立ハ其ノ前身トモ云フベキ福岡医科大学ガ明治三十年京都帝國大学ノ一分科トシテ開設セラレシニ基ヲ立テ、同四十二年工科大学ノ増設ニヨリテ成ル。

其ノ後大正八年農学部、同十四年法文学部ノ増設アリ、更ニ昭和六年別府市外ニ温泉治療学研究所ノ設置ヲ見ルニ至リ、終ニ現在ノ大ヲナセリ。其ノ間世運ノ伸展、文化ノ向上ニ伴ヒ、本学ノ組織経営及ビ分科課程ノ上ニ於テモ多少ノ變更増添スル所アリタリト雖モ、本学ハ常ニ時勢ノ進運ト相表裏シ、以テ其ノ耳目タランコトヲ努メタリ。是ニ於テカ来リテ本学ニ学ブモノ年ト共ニ其ノ多キヲ加ヘ、既ニ卒業生ヲ出スコト七千人ニ及ビ、其ノ多クハ社会ノ活機ヲ把持シ、各其ノ習得セル学識ヲ發揮シツ、アリ。又盛ナリトイフ可シ。本学ノ隆盛斯クノ如ク大ヲ致セシ所以ハ、一ニ時勢ノ進運ノ然ラシムル所ナリト雖モ、亦以テ開学以來關係諸先生ノ御尽瘁御薰陶ノ賜ナリト云フベク、余等ハ今日斯ノ嘉辰ニ当リ、特ニ諸先生ニ対シ其ノ御高恩ヲ敬謝スルト共ニ、思慕ノ情ヲ致サント欲スルモノナリ。惟フニ二十五年ノ歲月ハ本学存在ノ悠久タルベキニ比スレバ決シテ長シトナサ、ルモ、此間本学ガ社会ニ対シテ寄与シタルノ功績ハ蓋シ窮カニ誇ルニ足ルベキモノアリト信ス。我等本学卒業生タルノ榮誉ヲ担ヘル者ハ、本学将来ノ發展ニ対シ亦大ニ期スル所ナカルベカラズ。今ヤ国家ハ篤学勤勉ナル学徒ニ向ツテ期待スル所益大ナルモ

ノアリ。冀クハ我等日夜思フ茲ニ致シ、勉勵倦ム所ナク愈々本学ノ光彩ヲ發揚シ、以テ  
聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ。

茲ニ七千ノ同窓ヲ代表シ、我等ノ衷情ヲ披瀝シテ以テ祝辭トナス。

昭和十一年十一月七日

九州帝國大学卒業生總代

第一回卒業生 金子廉次郎

#### 祝 辞

維時昭和十一年十一月七日、我ガ九州帝國大学ハ創立二十五周年記念ノ祝典ヲ挙ゲラル。天ハ紺碧ニ彩リ、地ハ錦繡ヲ布キ、瑞氣場ニ溢レ、嘉賓堂ニ滿ツ、嗚呼盛ナルカナ。惟フニ維新以來東西ノ文化ハ澎湃トシテ我ガ国ニ萃マリ、渾然其ノ致ヲ極メ、就中學術教育ノ事駸々トシテ面目ヲ新ニシ、燦然其ノ美ヲ濟セリ。而シテ之ヲ率申之ヲ導クノ使命ニ至ツテハ、実ニ一國ノ最高学府タル大学ニ在リテ存セリ。顧ミレバ本学ノ創立セラレテ以來已ニ四半世紀、其ノ間理工農法文ノ諸学部相次イデ設置セラレ、広ク一世ノ碩学ヲ集ヘテ卓越セル研鑽ヲ洋ノ東西ニ競ヒ、常ニ二千ノ学生ヲ容レテ健実ナル学风ヲ國ノ一方ニ樹ツ。洵ニ居然トシテ学界ノ重鎮タリ。若シ夫レ其ノ卒業生ニ至ツテハ已ニ七千ニ近ク、各々其ノ專攻スル所ヲ以テ一國ノ文教社会ノ福祉ニ寄与セルモノ豈尠シト謂ハムヤ。今ヤ国力未

曾有ノ發展ニシテ内外多事多端、真ニ有為ノ人材ヲ要スル秋ナリ。我ガ学府ノ使命愈々重ク且大ナリト謂ハザルベカラズ。生等鷲鉞ト雖モ日夜孜々トシテ学徳ヲ磨キ技術ヲ鍊リ、以テ本学ノ教養ニ酬ヘ国家ノ要望ニ副ハムコトヲ惟フノ念、殊ニ茲ノ日ニ於テ切ナルモノアリ。

嗚呼博多灣頭波鏜々トシテ万歳ノ頌ニ和シ、千代ノ松原風颯々トシテ弥栄ノ唱ヲ奏ス。我ガ学園ノ前途亦洋々タルカナ。茲ニ今日ノ佳辰ニ当リ、在学生一同ニ代リ聊カ蕪辭ヲ陳ベテ祝詞トス。

昭和十一年十一月七日

九州帝国大学学生総代 住 江 剛

〔註〕原本に句読点追加。

## 二一八 九州帝国大学新聞記念号発刊の辞

〔九州帝国大学新聞〕第一五六号

一九三六（昭和一一）年二月六日

### 記念号刊行の辞

わが九州帝国大学、茲に創立第二十五周年を迎へ記念の盛典を挙ぐ。慶賀何をか加へん。

抑もわが福岡は天孫降臨の地に近く、史蹟人文の教養に資するもの亦た固より饒かに、桃花水暖きの候博多灣長汀曲浦の勝景を探り秋陽楓映ゆるの日宝満山頂天空海潤の襟懷を放まにし、或は籐壺壁

艦の威容を眺めて護国の重任を思ひ、或は砲煩兵器の精工を見て科学の進歩を明らかにするが如き、一山一水一事一物、皆これ研学修養の撰にあらざるはなし。天のわれわれに賜賚する真に渥しと謂ふべきなり。

今本学二十五年間の閱歴を按ずるに、明治大正の交に涉り日露、世界両大戦の起れるあり、わが帝国の国運は異常に伸張すると共に他面政治の変転經濟の膨脹より思想の動搖に至るまで幾多細心の注意を要するものありしに拘らず、本学先蹤が能くこの氣運を觀能くその機微を察し、以てその重責を全うせられたるはわれわれの窃に畏敬感喜に堪へざる所なり。しかもその間、彼の学士院賞その他の学会授賞の如きは、一時殆ど本学部内者のみがこの光榮を擅にするの感ありしなり。殊に畏くも大正五年十一月には

大正天皇の本学に 行幸在らせらるゝあり、大正九年四月には  
天皇陛下尚ほ 皇太子殿下におはしませしとき 行幸あらせられ、  
更に大正十一年三月には

皇太后陛下尚ほ 皇后陛下にわたらせ給ひしとき本学に 行啓遊ばされ、翌大正十二年五月には

皇后陛下の尚ほ 久邇宮良子女王殿下とあがめまつりしとき 駐蹕を仰ぎ奉りたるが如き學術御奨励の 御趣旨、拝察するだに恐懼に堪へざる所にして、誠に本学に籍を置く者の永久に銘記して忘るる可らざる所なり。斯くして昭和の 聖代に入るや多年の懸案たりし

(武藤)

理学部増設の気運も大いに熟し、本学が真個の綜合大学たるべき日も愈々近からんとす。他、面本学の収容人員は、当初纔かに六十名前後たりしもの今や正に二千名に垂んとし、卒業生の数は実に七千二百八十八。固より教育の事たる能く期月の間に於てその効を奏し得べきものにあらず、必ずや仮すに歳月を以てし期するに遠大を以てし、陶鑄鎔冶深く工夫を積まざる可らざるは言を俟たざる所なり。

然るに本学出身者間には既に国器俊髦彬彬として輩出し、文に武に朝に野に、偉勲を奏し鴻績を樹つるもの挙げて数ふ可らず。本学風の趨向する所、窺ふに余りありと謂つべし。

夫れ二十五年の歳月は決して長しと為す可らず。然れどもこれを人生に喩ふれば自らは是れ一期劃たるべし。さればこの一期劃の際に当り上は昭和新政の 聖勅を奉体し下は国運發展の趨勢を洞察し、その過去を顧みて此処に更始一番するは、大いに将来に進展せんとする者の最も必要とする所にはあらざるか。われ等些か思ひを此処に致し、本学先蹤の偉業を想起すると共に前途の多幸を視せんとし広く学の内外の援助を辱うしてこの記念特輯号を發刊したり。われわれは勿論これが為めに相当の苦勞努力を重ねたりと雖も、記事項目の選定乃至諸方より賜はりたる玉篇拝載の序列等に至つては、固より至らざる所甚だ多かるべきを懼る、偏へに大方の仁恕を仰ぐ所なり。

聊か蕪辞を陳べて刊行の辞となす。

二一九 過ぎし廿五年を語る記念座談会

〔九州帝国大学新聞〕第一五六号

一九三六(昭和一一)年一月六日

過ぎし廿五年を語る記念座談会

座談会出席者

▽来賓側△

医・名誉教授 田原 淳氏

同 武谷 廣氏

医・教 授 石原 誠氏

同 板垣 政 參氏

同 小野寺 直 助氏

同 大平 得 三氏

同 進藤 篤 一氏

同 荒川 文 六氏

同 山口 修 一氏

同 桑木 彧 雄氏

同 農・教 授 久保 健 磨氏

同 植村 恒三郎氏

同 中田 覺五郎氏

同	満田隆一氏
同	片山茂樹氏
同	丹下正治氏
同	大島直治氏
法文・教授	四宮兼之氏
同	長壽吉氏
同	豊田實氏
同	干潟龍祥氏
同	鹿子木員信氏
同	阿武京二郎氏
同	岡部龍玄氏
同	前田稔靖氏
同	武藤智雄氏
新聞部長 法文・助教授	その他部員一同

▽主催者側△

これは去る十月二十三日夜、わが法文会新聞部主催の下に医学部構内恵愛団食堂に於て行はれたる本学創立二十五周年記念座談会の速記である。当夜の会は午後五時半に開かれたが諸先生の無邪気な珍談貴き体験談は興味津々として尽くる所を知らず、文字通りの盛會に一同全く夜の更くるを忘れ、武藤部長がハツと気がついてそれでも残念さうに閉會を宣したのは、実に深更午前零時半であつた。

当夜の話はわれわれとしては初耳のものが甚だ多く、又事実その中には、諸先生が自ら告白してをられるやうに、先生方御自身もこれまで数十年間全く自分の胸中にだけ秘めて他人に洩らされなかつた事柄も随分と多いのである。われわれはこの貴重な本学稗史を、目出度き創立二十五周年を機として読者諸賢に送り得たことをひそかに誇とすると共に、当夜諸先生が老軀を推して長時間有益な教示を垂れられた事に対し、心からなる感謝を捧げたいのである。

座談会 速記録

主催者の挨拶

武藤部長

わが九州帝国大学が此処に過去四半世紀の輝かしき歴史を完成して、これより更に新たなる四半世紀に向つて進まんとする誠にお目出度い時期に際しまして、本学先蹤の偉業を御垂示願つてわれわれ後進の鑑と致し度く、総長閣下及び在福の名譽教授を始め奉り、各学部創立以来御在任の諸先生並に創立当時学生であられた諸先生——それに本学の将来に対する御高見御計画も併せて伺ひたく、現在の各学部長の御來駕を願ひ上げました所、幸ひにわれわれの微衷を容れられて斯くも多数の御参會を辱う致しましたことは、私共主催者の身に余る光榮であり、この御懇情に対し心から御礼を申し上げる次第であります。

「今夕のお話は全く座談的にお運びを願ひたいのでありますが、一応私共の方で伺ひたいお話のトピックを刷つてお廻し致して置きました。これとても勿論不完全なもので御座ぬますし、たゞ諸先生方の御参考に供したといふに過ぎません。即ちこれは次のやうなものであります。

座談項目

- 一、京都帝国大学福岡医科大学時代
  - 二、九州帝国大学創立
  - 三、医学部史
  - 四、工学部史
  - 五、農学部史
  - 六、法文学部史
  - 七、図書館創立
  - 八、学生監、学生課、学友会
  - 九、本学の将来
- では時間の関係も御座ぬますのでこれからポツポツお始め願ひますが、何せ私は若輩で昔の事を一向存じませんので、甚だ恐縮で御座ぬます。医学部に関しては板垣先生、工学部に関しては荒川先生、農学部に関しては満田先生、法文学部に関しては大島先生に座長をお願ひ致したいと存じます。

尚ほ一寸おことわり致しますが、本夕高山総長は御出席の筈であ

り既にその御快諾も得てをりましたので御座ぬますが、先程どうも身体が思はしくないので今度迄は欠席したい、就いては御出席の諸先生方に呉々も宜敷くとの事で御座ぬました。私共と致しましては残念この上ない事で御座ぬますが、御病氣とあつては致し方もない次第であります。どうか御諒承願ひ上げます。

では板垣先生、どうぞ。(拍手)

京都帝大福岡医科大学より九州帝大医学部へ

座長……板垣教授

医学部沿革

板垣教授

武藤部長の御命令であります。私が私は座長たるべき資格のないものであります。便宜上、医学部に関する限り、進行係を勤めさせて頂きます。

先、医学部の創立に就て御話を願ふのが順序と考へますが、之に就ては茲に調べたものを持つて参りましたから、時間の節約上、之を基として私より申述ることに致します。

扨医学部の歴史は、福岡県立病院時代に遡らなければならぬ様であります。故大森治豊博士によりますれば、早くも慶応四年の頃に於て、病院の基礎とも称すべかりしものがあつた相であるが、其詳細は知り難いと申して居られます。明治十二年福岡県が設置せら

れ、翌十三年には県からの醸金によつて県立医学校が東中洲に建設せられ、附属病院及び薬学校も之に附設せられ、十七年三月に第一回卒業生を出した。処が明治二十一年に至つて医学校が廃されて病院が独立したが、其病室の如き甚だ不完全なものであつたから、二十五年に千代村大字堅粕字東松原（現今の医学部敷地）に於ける官林三万十一坪五合（地価五千三百三十三円）を敷地として八万三千十六円の予算を以て病院を新築せんと議が三ヶ年の継続事業として県会を通過し、二十九年六月落成移転し、其後病室の増築、設備の増設が逐次行はれた様であります。時の病院長大森治豊博士は、明治三十年六月二十一日、県立病院移転一週年記念式に於て

『益す進んで拡張の方針を取り九州帝国大学設立の晝迄には医科大学たるに恥ざる位の進歩をなし、患者を収容しなければならぬ』と謂ふて居られる、即ち博士は已に初めから九大医学部目指して鋭意其経営に当られ、献身的努力をなされたもので、次に述べる九州に医大設置必要の議が政府に起つた時には、独り其設備の完備、其規模の大に於て全国有数の病院であつた計りでなく、其人物に於ても大森院長始め、内科熊谷玄丹、小児科伊東裕彦、婦人科池田陽一等一流の名医を集めて居つたもので、既に福岡医科大学の基礎たるに足る陣容は整つて居つたのであります。

明治三十三年頃丁度桂内閣が組織され曾禰氏蔵相、菊池大麓氏文相、岡田良平氏次官であつた時に、一つの問題が起つた、それは当

時高等学校は大学予科であつたから、其の卒業生をば必ず大学に収容せねばならぬ政府の義務があつたのである、処が高等学校三部の卒業生を既設東京及び京都両帝大に収容し切れなくなつたので、九州に一医大創設の必要を生じ経費百三十万円で創立の計画が立てられた、処が此かる巨額の支出は、財政上到底不可能だとして廟議で否決された、そこで菊池文相は大々的決心を以て再議を乞ひ、熱烈に其の創立の必要なる所以を披陳された結果幸に復活せられた。

処で九州帝大所在地について、熊本、長崎、福岡の間に競争が起つたが、福岡県立病院が其規模に於て、内容に於て、人物に於て優つて居つたのみならず、県民の熱心なる運動又大なるものがあつた為に、三十四年十二月二十八日大多数で、福岡に医科大学を設立する議が、衆議院を通過し、越て三十五年一月十五日貴族院を通過し、三十五年度から新営工事に着手するに至り、一面福岡県は県立病院敷地、建物及其他の物件を寄附し三十六年三月二十四日、勅令を以て京都帝国大学の一分科大学たる福岡医科大学として茲に其設立を見、越て四十三年十二月九州帝国大学が設立せられ、四十四年四月一日から九州帝国大学医科大学となつたのであります。

右は設立までの歴史一般でありますが、其当時の思出は御列席の古参教授、名誉教授方々に沢山あらるゝわけでありますから武谷、田原、石原先生達に一つ御願致します、

では、先づ石原先生にお願ひ致します。（拍手）

思ひ出の一……教官として

石原教授

御指名に従ひ、私は福岡医科大学設立当時の思出として、私自身の直接に見聞せる事を申述べる事とします、私自身の直接的見聞でありますから、勢、私一人の事も出てまゐり、お聞き苦しい点もあらうかと思ひますが、之は前以て御容赦を願つて置きます。

右福岡大学設立の予算が、明治三十四年末の議會に提出せられ、翌三十五年始に、其通過の見込が確實になり、開学は其翌三十六年の予定として、文部当局は早速、教官候補者の決定に取りかかり、私は其最初の者として、一月中旬に留学の内命を受けました。実は私は三十四年十二月末に東大医科を卒業しまして、先づ同生理学の助手となり、何年かの後には、生理学第二講座を担任する事に決つて居りましたから、折角の恩命ではあるが、堅くお断りました。その為に、私は始めて当時の文部大臣菊池（大麓）先生と次官（総務長官）岡田（良平）先生とに御目にかゝることになりました。

其節大臣は『今度、西日本文化の中心として、福岡に大学を置く事となり、先づ取敢へず医科を設立する、数年前開設された京都帝大は規模小に過ぐ、福岡のは京都は固より、東京帝大にも劣らざる大規模の学府としたい考である』と御話になりました。

岡田次官からも同様でありました。私は此両先生の意気と知遇とに感激し、遂に恩命をお受して、早速二月上旬、独逸留学の途上に

りました。一月下旬には、電命により上京された大森（治豊）先生（当時の福岡県立病院院長、新設大学の学長となるべき人）にも始めて御目にかゝりました。出発の前日には、同窓友人の発起にて、私の為に上野、精養軒にて送別会が開かれましたが、之に東大医科の諸先生の外に、大臣と次官とが当時の東大総長山川先生と共に、御臨席下されましたのは、全く思ひもよらぬ事として、大に驚きました。之は全く先生方の此大学設立に対する御熱意の発露に外ならぬのであります。私には終生忘るべからざる光榮であります。

菊池、岡田両先生が爾来始終一貫本学の為に御尽力なした事、事は、私から特に申上げるまでもない事と考へます。私は特に四年間の留学を許されましたから、廿六年の医科大学開設には間に合はず、廿九年九月（当時は九月が学年始）に帰朝し、始めて当地に來り爾來引続き今日に至り此度皆様と共に九大廿五周年記念を迎ふるを得るは実に歓喜の至に存じますが、之と共に菊池、岡田両先生を憶ふの念に堪えません。私は斯く長く奉公させて貰ひ、学問報国の念願は今尚旧の如しとは申しながら、依然として呉下の阿蒙たるに止り、徒に白髪を加ふるに過ぎぬのは、申訳なき次第であり唯々慚愧するばかりであります。

大学開設の翌年には日露戦役が起りました。私は独逸留学中でありましたが、国家の存亡にかゝる戦争ではあり、且つ開戦と共に独逸在留の露西亜學生が皆帰国しましたから、私等も無論帰朝を命ぜ

らるゝ事と覚悟して居ました処、其内に文部省から、帰朝に及ばぬ引続き勉学せよとの内命がありました。之は 明治天皇の 聖旨に因るのであります。彼地の教授方は驚いて居ました。

第二年目の対馬海戦の時に思は戦場に近き福岡の大学にも及ぶのは当然でありませう。其翌年帰朝早々、其時の模様を聞きました学生からは、廿七日の午後には皆が、大学裏の浜辺に出で黙々として一語も発せず、巨砲の響に聞入りて居たとか。

又伊東(祐彦)教授夫人からは、同日、小巡洋艦が一隻、みじめな姿で博多湾に逃げ込んで来り、之に次で、遠雷の如き砲音に障子が振動し始めたので、或ひは敗北ではないかと心配して、重要品を行李に納め、何時にても一日市方面に避難する準備をしたが(笑声)、夕方には大勝の号外が出て、始めて安堵したなど、承つた事を記憶して居ます。

私は前に申した如く、開学の後二年に帰朝しましたから、其時には、最初の入学生は既に四年生となりて居ました。

現医学部の後藤、赤岩教授は其中に居られ、又小野寺、大平、高木教授は三年生、進藤教授は二年生でありました。教授方は既に半数以上、就任して居られました。之は何れも私には先輩であり、特色ある新進気鋭の学者でありまして私は其驥尾に附して、勇躍、働き始めました。

私は論外ですが、諸教授の活動に依り、新設の大学ではありなが

ら、カナリ学界を聳目せしむるものがあつたかと思ひます。当時の学生は粒が甚だ不揃で、驚くべき秀才が居るかと思ふと鈍才もなきにしもあらず、然し何れも明朗にして、潑刺として居り、教授方も一般に壮齡でありしこととて、学生との間は甚親密でありました。他方に中等校以上の学校がなかつた処に、一躍、大学が設けられ、然も之が熊本との間に劇烈なる競争の結果である事とて、土地の人々は大に学生を優待しました。それで辺鄙の小都市ではありながら愉快にして有効なる学生生活が出現したのであります。

秋季運動会には市民を招待し、小学生、中学生の対校競走をさせ、記念日には大学を開放、観覧せしめる事としました。之が市民の年中行事の一となり、今日に及んで居る。四十年七月には第一回の卒業式が現医学部運動場に於て挙行された。式後、所謂学士鍋の豚汁を満喫し、夕方には市長の招待を受け、福岡商業学校生徒の先導にて、卒業生一同、其後に私等も随ひ行列を作りて、当時の東中洲、商工会議所に行きました。

斯くの如き特色は其後、大学の拡張、市及び近郊の発展等と共に漸次失はれて行き、彼の市長招待も何時の間にか立消へになりました。

明治卅九年頃の福岡は人口数万を出でぬ小市で大学は市外にあり構内は固より、其前面の東公園、両隣の崇福寺、箱崎も松が沢山にあり、大学は千代の松原の真中にあるが如く感じました。網屋の如



きは一小漁村にして、瓦葺の家は一、二を数ふるに過ぎず、現法文学部より東は多々良川に至る迄、松原続きで、米一丸の墓が淋しく立つて居たに過ぎません。

福岡市自身も現在の掛町筋が本通りであり、現西中洲公会堂の附近は真の中洲で、島になつて居り、現東中洲には、確か小劇場が一つあつた丈と記憶します。現在の橋口町や蓮池には郡部に通ずる、貧弱なる乗合馬車（一頭引き、四人乗）の発着所がありました。

其頃、米は一升十一、二銭、春吉より大学迄、人力車代は十銭位。私の如きも毎日人力車にて往復しました。斯くの如き状況は四十三年春、共進会開催を機として、カナリ急激に変化し、其れから市及び近郊が大いに発展し始めました。

現在の福岡丸之内たる福岡日日から放送局の辺はお城の外堀であつたが、其を埋立て、其処に共進会が開かれ、其直前に大急ぎにて、現在の電車通が新設せられ、電車が始めて箱崎より今川橋まで通ずる事となりました。

翌四十四年には工学部の新設と共に、九州帝大が創立されたのであります。其四月には山川先生が総長として御出になりました。別に本部の建物としてはないので、今迄の医学部の事務室の一半を本部とし、学長室が総長室となりました。平屋の角の室として、外から窓を通じて先生の頭が見られる。

先生にお目にかゝると、心が自ら引締るを覚へたのは、私だけで

はないと思ふ。非常に熱心に研究を奨励せられ、本部の経費を節約して、研究を補助せられた。私も幸に之を頂いた事があります。常に正義を守り、身を捨てゝ悔みざるべきを説かれたのは、申す迄もない事であります。此真理を求め、正義を守る之が本学の伝統であると思ひます。

之にて私に申述ぶべく御指名になつた範圍は終りましたが、尚一言、附け加へる事をお許し願ひ度い。其は始めに申上げた如く、本学設立の念願は西日本の文化中心たる雄大なる学府の出現であり、創立以来、徐々ではあるが、其方向に進展しつゝありますが、日露戦役、次で欧州大戦を経て、国運が飛躍発展せる今日は、我福岡は地理的にも我国の中心に位する事となりましたので、我々は啻に西日本と言はず、全日本の文化中心たるを目標として、更に大に努力せねばならぬと思ひます。大学は生命体でありますから、潑刺として絶えず生々發展すべく、其間に時代を劃する事は不可能でありますが、時には、過ぎにし過去を顧みて、自ら戒め、発奮に資する事は無益ではない。之が今度の廿五周年記念の意義であると考へます。

（拍手）

板垣教授

只今は色々面白い話をして頂いて有難う御座りました。では次に田原名誉教授にお願ひします。（拍手）

田原名誉教授

只今石原教授から色々お話がありましたので、別に私よりお話しすることもありません、先程医科大学の出来た経緯に付て板垣教授より読まれましたが、あれは勿論ホンの表面のことなんで、実は初めから福岡に出来るといふ訳でもなかつた。石原教授の述べられた通り非常に競争者があつた。

熊本、長崎——殊に長崎は御承知の通り、日本で一番古い西洋医学の巢立つた処であるといふ意味で、又熊本は九州の中央の都会であるといふことで、非常な競争が起つたやうです。併し詳しいことは知りませぬが恐らく福岡の病院が他の病院に比較してよかつたといふこともあつたでせうし、特に大森さんが非常な熱心であつた外福岡県の官民も一致して熱心に運動せられたといふことで、遂う〳〵勝を制したといふことであつたらうと思ひます。

武谷教授は福岡に生れたので、僕よりさういふ点は詳しく御承知かも知れないが、僕も九州の一部に生れた人間でその頃問題のあつたことを多分知つて居つたのですが兎に角非常な競争の結果、愈よ福岡に決つたといふ裏に事情があつた。それからこの医学部を〳〵に置くといふことに付ては、例の遊廓が川向へにあつた關係から文部省で問題になり、遊廓を処分しなければいかんといふので詰まり福岡市が遊廓を今の新柳町と申しますか、あすこに移しまして医科大学を元の県立病院の処に許可するといふことになつたそうでありませぬ。

その他のことは大抵石原教授のお話で十分だと思ひますから、私はこの程度で御免を蒙ります。(拍手)

板垣教授

どうも有難う御座りました。では次に武谷名誉教授にお願ひします(拍手)。

武谷名誉教授

私も武藤部長から、何か大学新聞の方に書けとの御仰せで、大森治豊先生のことを少し許り書いて置きました。〳〵ではそれ以外のことを少し申上げたいと思ひます。

大森先生の銅像は、あそこに立つて居りますが、銅像にはないけれども先生は痘痕のあつた人です(笑声)。又あまり風采の上がらない、身長が低い、一寸見ると迎も大病院の院長など〳〵は思へない方でありました。私が知つて居る逸話の中には、色々先生の性格を充分に窺ふに足ることがあります。それは先生が外科の大家として非常に盛名を馳せて居られた頃に、博多の或る家で先生に往診を頼んだ。先生は草履を履いて行かれたさうです。病家では大先生とは思はない。先生が診察を了へて帰られようとするので

『大森博士はいつお出で下さるでせうか』と尋ねると

『いや、あれは後から来る』(笑声)

といふことですから、病家では後から来られるものとのみ思つた。が一向に来られないものですからよく問合せを見ると、

『今お出でになつたのが真実の大森先生だ』  
 ということで皆が驚いたといふ話があります。先生は全く辺幅を飾らない人でありました。

大森先生は、明治十二年に東京大学を卒業して、すぐにこちらに見えて非常な大家になられたのに長い間人がよく識らないといふのは人からおじぎせられるのが嫌やだといふので、病院の往復には人力車の上で始終雑誌を読んで居られる。これは私が福岡に来てからでも、何時もさういふ風であつた。

それから三野原愛四郎君から聞いた事ですが、同君が岡山の学校を卒業して内科の助手になつて来て自転車に乗つて居つた。大森先生は之を見て非常に面白く思はれて、三野原君に乗り廻させてよく観られた。『これはいゝものだね』と言つて居られたが、間もなく調理場から病棟に食物を運ぶ車に、ゴムの輪を嵌められた。

先生は斯んな風に何んでもいゝことには眼を着けて、着々と尖端を走るたちの人であつたことが此一事でも判ると思ひます。

先刻石原教授から、大森先生が上京の時には駿河台の下宿屋見た様な宿屋に居られたことを話されたが、私も助教になる前に先生から『メンタルテスト』を受けるために大西博士の病院に来いとの電話を矢張りこの駿河台の『せきねや』といふ高等下宿屋に居られた先生から受けたことがある。是が先生の常宿であつた。先生の質素な風が是でも窺はれます。私は明治三十五年末に卒業して、三十

六年の夏福岡に一才帰つて来ました。そのときは卒業後二年を経れば助教採用せらるゝことに決つて居つた。先生に会つた処が、先生はいきなり私に『君は金がすきか』と藪から棒に聴かれた。何んと返事していゝか困つたが、ありのまゝ言つたらよからうと思ふて『初めは金もあまり要りませぬが、家内を貰つた後には子供も出来ませぬ今はいふシヤツも二週間に一度洗濯して居ますが、之も後には一週間に一度位したいから教授になつたときは百五十円位は貰ひたひ』と言ひますと『あゝさうか』と唯一言、それきりであつた。それから小倉に帰省して斯ういふ質問を受けたので斯う答へたと父（当時小倉第十二師団軍医部長）に話すと『さう云つたのはよかつたらう』と父がいつた。（笑声）そんな風に先生はいきなりポカ／＼と人を試験された。

それから外科の御方は御承知でせうが、こゝに来て一寸へんに思ふたことは、東京では開腹手術を致しますと、腹部にグルグルと繃帯を巻きます。処がこゝでは紙を繃帯の代りに使ひ石堂水飴と酸化亜鉛を研和して（冬は之にグリセリンを加へる）作つて膏薬（膠飴膏）で両端をとめて簡単にうまくやつて居る。これも大森先生の考案になつたものださうです。今でも外科で使つて居りますからね……兎に角思ひつきのいゝ人で、色々なことをなさつた方でございます。……先生の逸話——性格といふやうな話はそれ位に止めて置きます。

私は三十九年の末に外国にやられて、四十二年に帰つて来ました。帰つたときは先生は宿痾の脳溢血の爲めに静養中で半身が少し不自由になつて居られた。健康上のことに付て御相談を受けたこともありまして、色々知つてゐることもありますがその話はやめて置きます。

私が参りましたのが明治卅八年の二月でありましたが、そのときの教室はどうかと申しますとその頃の古い病院は今では皆建て變つて了つた。今の医院事務室のある処は私の洋行中に出来たものです。基礎医学の教室は薬物学がありました。それから病理、解剖、生理、医化学迄出来て居りました。宮入教授は衛生学（そのときは細菌学は未だ独立して居なかつた）で、後に教授になりました小川政修君（助手）とともに薬物学教室の中の二つの部屋でやつて居られました。それから熊谷玄旦先生は大森先生と同窓で内科を受持つて居りましたが、私が来まして間もなく辞職願を出された。詰り三月の末頃からは出られないやうになりまして、私が助教授の分才で内科を一人で引受けて居つたやうな訳であります。

明治三十八年の十二月末に、予て留学中の稲田助教授、中助教授が帰朝して教授になられ内科が二つに分れた。私が来たその当時のことを今から考へれば実に恐縮する様な話ですが、卒業して三年目でした……盲人蛇に怖ぢらずで診断学や内科学を教へた訳です、第一回の京都帝国大学福岡医科大学卒業生の諸君はやつと二年生であつ

た。未熟な私であつたから当時の学生で居られた方は、非常に迷惑されたことであらうと考へて居ります。それから当時新に来たものは学友会（教授と学生との集会）に於て何かしやべらなければならぬといふので、私も助教授でありましたからやりました。即ち東京の三浦内科で明治三十七年に恩師三浦謙之助先生が御私有の臭化『ラヂウム』を三人の患者（私の受持の慢性関節ロイマチス患者、青柳学士の肺デストマ患者、米山学士の手術不可能なる肋骨肉腫患者）に用ゐられた成績に加えて『ラヂウム』の生物学的作用を東公園日蓮上人銅像の前の元寇記念館で講演したことがありました。因に日本で『ラヂウム』を購求せられたのも、従つて之を医療に応用せられたのも、吾が三浦先生が最初の人であります。

それから当時は教授にも、却々豪の者が居つたですね……その尤なるものは大西教授が一人、——三宅教授は優しい人ですが或る一面は却々強い人です。この二人の性格をよく現はして居ることがある。それは三十七年に三宅さんが始めて来られたときに附属医院の玄関で巡視が咎めた。すると三宅さんは叮嚀におじぎをして『私は三宅といふもので、今回外科の教授になつて来たから何うぞよろしく』と言つて通られた。明治三十八年の初めに来た大西教授は巡視の顔をじろ／＼とよく観た後に『お前はよく俺れの顔を覚えて置け』とどなつて、後は何も言はんで行つた（笑声）。これなどはよく御一人の性格を現はして居ると思ふ。

それから当時は大学の前も非常にさびしかった。唯不老館と他にせんべい屋が一軒あつた丈だった。崇福寺前なども他に家は何んにもなし、あの辺は夜通ると恐ろしい位であつた。私は東職人町に居りましたが、そこから自転車に乗つて通つた。之を預ける処がなかつたから前にいつた煎餅屋に預けたものだ……玄関に置くと盗まれる心配があつたから……それから日露戦役……私は明治三十八年の二月に助教授を拜命したのですけれども実は正月過ぎて来ました。旅順の陥落は東京で正月に祝つたのであります。恰度五月の二十七日の午後には在福岡の高等官の懇親会が今の須崎の赤十字社支部の二階で開かれて居りました。当時の知事は河島醇といふ、却々やり手であつた。その人を始め福岡の高等官の連中は大抵皆来て居つた。私は助教授で高等官七等であつた。会が始まつてから、大砲の音が聞こえたことなどを語り合つて、皆大に心配して居つた。汽船も二艘湾内に逃げて来て居つた。そこへ電報が来たのです。知事宛、郵便局長宛等の電報が来て皆披露せられた。何れも大勝利／＼で、後には真実にこんなに勝つたかしらんと皆少し疑つた位でありました。翌日になつて正しく事実であることが分つた。歓声湧くが如しで市中は大騒ぎをした。大学でも博多湾内で船上の祝捷会が催された。それから大砲の音はハツキリとは聞こえませんでしたけれども、私の宅でも夜になると戸がガタ／＼と振動してまだやつつけて居るなと思ひました。それから私は前申しますやうに日頃は自転車に乗つ

て居りましたが、雨の降るときなどは之を掃除するのが嫌だから、石原教授のやうに人力車に乗りました。東職人町からこゝ（大学）迄賃金は十三銭であつた……これ位で……。 (拍手)

思ひ出の二……学生として

板垣教授

先程石原先生から、その当時は福岡の医科の学生には色々変りものがあつたといふお話がありましたがその当時の三部の卒業生といふのは、今の高等学校の理科乙類に相当するわけでありますが大学に近い高等学校は別として各高等学校とも東京大学入学希望者が多くて福岡希望のものは寥々たるものであつた。それで文部省も致し方なく第一に希望の順序、次は成績の順位で各高等学校卒業生を三つの大学に割振つた、それで当り前に勉強すれば優秀な成績を挙げ得たのであるが、呑気にやつて居つたために、たま／＼試験の成績が悪かつた結果こちらへ来た人もありませうし、一般に東京々と都に憧憬るのを苦々しく思つてみつちり田舎で勉強し様といふ考で来られた人もあつたらうと思ひます。そんなわけで福岡には色々の人が集つた事と思ひます、其中振つて居るのは一高から来た第二回入学生（三十七年）であります、此組は初めて一高に英語で入学許可になつた組で（三十四年）大変秀才が集まつたといふ評判でしたが其人達が天下に檄を飛ばして大挙福岡目指して来られた。その人達の中にはこゝに居られる小野寺教授、大平教授、及び今晚御欠席

の高木教授、それから今岡山の学長をして居られる田村教授、前大  
阪医大石原教授等が居られたわけです、それで次に当時の学生々活  
について御話を承つたらと思ひますが今晚は生憎第一回卒業生の後  
藤教授も赤岩教授も見えて居られませぬから今晚御見えになつて居  
らるゝ人達の中で福岡医科大学学生生活をせられた一番古いお方は、  
小野寺教授、大平教授でありますから、両教授から、その当時の学  
生生活その他の話を伺つたらと思ひます。(拍手)

小野寺教授

私共高等学校を卒業する時、一高の私共のクラスの担任教授の丸  
山先生……御承知の方もありませんが、先生はまだ一高に勤めて居  
られますが独逸語の時間を休んで、毎日慷慨悲憤の演説をせられま  
して『国家の費用で大学を作りながら、学生の悪いものだけをやつ  
て居るといふことは当局もよろしくない、併し吾々としても黙つて  
見てゐることは出来ない。矢張り今軍人が(当時は日露開戦中)満  
洲で戦つて居ると心持は同じぢやないか。自分の一身の栄達な  
どいふことは考へない、国家の為誰か義憤を起さなにか』といふ  
ことで、遂々一旦東大志望として出した願書を取り戻して福岡志望  
にかへて出したのです。

こうして志願したのが二十三名——途中脱会者が二名出来まし  
て二十一人になつたのです。それに籤引で加つたものがあつて三十  
八名一緒に福岡にやつて来た訳であります。唯茲に一つ弁明して置

きたいことは、お前達は教授にならうと思ふて志望したのだといふ  
人があることです、……(笑声)さういふ積りは私共にはなかつた。

それで読売新聞、時事新報、万朝報——さういつた新聞に声明書(執  
筆者は三木熊二君)を出しまして『満洲に行つて居る兵士も吾々も  
心持は同じである、親が何といつてもこの方針は変へない』といふ  
ことを申合せた。家に帰つて大へん叱られました。(笑声)

が、さういふ訳でこちらへ来ました。こちらへ来ますと、一生の  
中に一度は西洋に行つて見たいなどいふ位が吾々の希望で、教授に  
なるなどといふことは考へてゐなかつた。尚私共が福岡へ来やうと  
思ふた理由は東京の医科大学はもう古い、京都もやゝ古くなつた。

九大は今恰度学校が出来たばかりでいゝ人を拾ひ上げて行つてゐる  
から、これからの福岡医科大学はよくなるといふのが一つ……大森  
さんは非常に異つた人で特待生——その当時は恩賜の銀時計とい  
ふやうなことは、学生の狙ふ的でありましたが……或は優等賞とい  
ふ様なものは福岡では設けない、学問は好んでやるべきもので懸賞  
でやるべきものでないといはれてゐた、そんなことに吾々若いもの  
は非常に共鳴致しましたこと、学資金も少なくて済むであらうといふ  
様な事もあつてさういふ処へ行かうぢやないかといふやうなことで  
ありました。ところが私共は四年になつて第一回の卒業生が出て来  
た。処が優等生には恩賜品を賜はる。茲に居られる進藤君は特待生  
になられた……これは一寸話は違ふ、さういふ事は無いのがよいと

思ふて来たのですが、従つて私共のクラスにも前のクラスにも特待生はなかつたのですが、四年にして世間並になつたといふことは遺憾なことでした。今尚遺憾だと思ふて居ります。

それから学生時代からアルバイトをすること……それは福岡医科大学の一つの特色であると思ひますが、私は石原教授の講義は聴きませんが三年の夏休に郷里へすぐ帰へらずに先生の教室で仕事をし、それを書きあげて東京医学会雑誌に発表した、こんな事は私のクラスで初めてではなかつたかと思ふ。この頃は余り学生が多くなつてそんな事が実行が出来ないといふ状態に残念乍らなつて居ります、それから卒業して見ると日本に居て医者で以て帝国学士院恩賜賞を授けられた方は、皆九大の吾々の先生方でありました、最初は病理の田原先生、その次に稲田先生といふやうに、日本医学界の最高の榮譽は、皆九大が担ふものだと非常に吾々は誇りを感じたものであります、その後不幸にして他からいゝ人が出て来まして九大からその後継者はまだ現れませんが、そう考へて見るとこの二十五年に幾ら吾医学部が進歩したかと考へて見たくなる。それは又役者が變つて申上げることゝ思ひます。

それから博多へ来た直後の感想を申して見ませう。来ると直朝御飯にオキユートを食はされた。宿の人に憤慨して抗議を申し込んだ。又朝から白味噌に鯛（大に宿では優待したのでせう）を入れるのは不都合だと云つて厳談を申し込んだ様な珍談もありますが、東京も

福岡も今は同じになりまして、風俗でも、食事でも昔の様な甚だしい相違はありませんが、私共が来た頃の福岡と大へん違つて居た。斯ういふ風に違つて何でも東京化して来るのならば学生も東京に行つた方がいゝと思ふ様になりませう。（笑声拍手）

板垣教授

中々面白い話を有難う御座りました。では続いて大平教授にお願いします。（拍手）

大平教授

私は大森先生のことについて二つ三つ申し上げて見たいと思ひます。先程石原先生から福岡大学のズツと前のお話がありましたが私はズツと後輩でありながら、それよりもつと前のことを一つ知つて居るのであります。

実は私の親父にも関係がありますが、大森先生は山形県の方ですが、私の親父は山形県の県立病院の副院長見たやうなことをやつて居つたのであります。明治十二年に大学を出た大森治豊といふ人が院長になつて来るといふので、副院長の親父が、其の他と語らつてストライキを始めた。（笑声）そんな大学を出たばかりの院長は吾々が戴かんといふことを決議して騒いだといふことであります（笑声）が、それが大森先生には非常に仕合せになつた訳であります。福岡に立派な病院があるといふことで、こちらへ来られたのであります。先程からお話がありましたやうに私も小野寺教授、高

木教授其他の方の驥尾に附して福岡に來たのですが、其時親父の申しますには、お前が今度大森氏の処へ行く訳だがと今申上げたわけを話しまして、一度お詫びをして置いた方がいゝだらうといふことでありました(笑声)。この話は今迄誰にも話したことはないのです。それで何うも学校ではお訪ねしにくいので、当時洲崎の辺にありました大森先生のお宅にお伺ひまして、親父が一度上つてお詫びをして置く様にといふことでございましたから参りました、將來よろしくお願ひ申しますといふと『さうか君があいつの件か』といふ話で(笑声)ハツキリは記憶致しませんが、それ位で引き下つたことを覚へて居ります。親父がさういふ騒ぎをした為、大森先生には反つて仕合であつたと思ひます。誠に妙な奇縁であります。

さういふ訳で大森先生の教へを受けるやうになつた訳であります。が今日より考へますと、今日の組織的な研究とか講義とか云ふものに比べると、大森先生の場合は余程変はつて居つたと思ひます、例へば繙帯字の如きも何時間位あつたか知りませぬが、結局今私共の頭にありますのは足を繙帯するときに『細い処もあり太い処もある。要するにこれだ』とビールの瓶の太い処と細くなつた処を巻いて *Verhandlere* といふものは殆んどお了ひになつたやうであります。(笑声) さういふ風な教へ方でありました。

それから先程日本海々戦のお話がありました、石原先生や、武谷先生もお出でになつた事と思ひますが、大きな伝馬船に、学生も

看護婦も全部乗せてそれを小蒸気船に牽かせて博多湾を楽隊を伴れて廻りまして学校に帰つて学校から瓶詰の酒を一本宛賣つた。私は飲めませぬので同宿の小野寺教授に上げましたがその二本を随分長い間持つて居られたやうであります。こんなことは今から考へますと隔世の感があります。さういふことを大森先生はなさつたことのやうに思ひます。

尚先程も小野寺教授と話して居りましたが、当時は石原先生、田原先生、武谷先生といふやうな方は教授の側から創立に参加なされた訳であります、吾々学生は学生として参加したといふやうな意味で、学生が旅費を貰つて講師の先生方のお迎へに行つたりしたこともあつたやうであります。それから色色名士を招んで來たりするときに、多少お手伝したり、手紙を持つて行つたりしたことがあります。

それから吾々が病理を習ひました桂田先生を岡山からお迎へするときに、大森先生らしい失敗をして居られるのであります。それは当時の岡山の学長の菅といふ方の処に向けて、桂田をうまく引張つたといふ意味の手紙を書かれた。それを桂田さんの状態に入れて出された。(笑声) さういふ逸話は充分あるやうであります。

兎に角先程から色々お話のあるやうに、先生と学生との間が大へん近くて、小野寺教授は生理の教室で確か血液の仕事して居られましたが、私共は宮入先生の処で細菌学のことを教はりながら、ズツ



ト夏を暮らしたり致しましたが、宮入先生は朝から晩まで、日の暮れる迄、殆んど休まないでやつて居られた。こんなことなら吾々は大学に行つて学問して行けるか何うかといふことを疑つた程でありまして、弁当は一つで足りない。朝八時頃来て見ると、ちやんと先生が来て居られる。結局七時頃から来て、晩八時過ぎまで居られるのでありますから、疲れて了つた。それで十時半頃弁当を一つ食べて三時半頃に又一つ食べる、了ひには重箱を持つて来るといふことで四、五人勉強して居りました。そのみならず色々なドイツ語のドラマなんか、先生に読んで頂いたりしました。あちらでもこちらでも多少それに類したやうな生活をやつて居つたやうであります。それから福岡市のことを一寸申上げますと、今の県庁の直ぐ傍だつたか何うか知りませんが、中洲あたりはまだ葦が生えて居りまして、あのへんの石垣なんかには鰻が居たりして、今の高山総長が切りに穴探しをして魚を獲つて、翌日提げて来られた。宮入先生はその血液の検査をするといつてやつて居られたやうであります。

これでも当時の学生生活が、どんな状態であつたかといふことが幾らか判ると思ひます。大体それ位で……。(拍手)

板垣先生

最後に残つて居られる医学部の進藤教授のお話を伺ひたいと思ひます。(拍手)

進藤教授

只今板垣教授から、私にも何か話をするやうにといふ御下命でございますから、私の思出のまゝを二三申上げたいと思ひます。私は只今お話のありました小野寺教授の次の年に、こちらへ参つたものでございまして、こちらへ参りましたときは、只今小野寺教授からお話がありました義憤者の一人である丸山といふ人、これは恰度私の郷里の人でありますのでその人に伴られてこちらへ参つたのであります。

そうして一番最初に『とてもいい処だらう』と云はれたのはそれは恰度名島の鉄橋を渡つて千代の松原にさしかゝつた時で……一高の記念祭のときの寮歌を思ひ出して、之れが千代の松原かと第一印象は洵によく感じました事を覚えて居ります。それから吉塚駅で降りまして、あの三角のお稲荷の傍らに、その人の下宿がありまして、そこへ伴れて行かれました数日間泊つて居りましたが、そのときから今迄私の耳から離れません一つの記憶は、九州鉄道の機関車のポーといふ大きい響きでした。汽車の機関車の響はピーといふ音ばかりと思ひましたが、ポーと大きく響きましたので(笑声)、その音が耳に這入りましてから考へるともう三十一年にもなります。

それから箱崎網屋の方に下宿を求めまして、丸山さんと二人で箱崎の方に参りました。三角に居るときは石原先生の御令弟などとも一緒の下宿になつて居られました。今でもその家はお稲荷さんの傍にあります。それから今日迄箱崎に居る訳であります。箱崎の網屋は

その当時本町と新町と二通りでありました。今の白浜町は網干場でありました。その当時あのあたり一帯は皆藁家でありましたが、唯私共の下宿屋の一軒だけが瓦屋根でありました。それは大学生を見込んで家を建て、下宿をする為に瓦屋根にしたやうであります。

それから私共は恰度九月に来たのですが夜中に松原の中でカンカン鉦を叩くので驚きました。夜中の鉦は火事の鐘とばかり思つて居心しました。その当時放生会で面白く且つ事變つて私共に見えましたのはあの松原に幔幕を張つて博多から長持、箆筒で一家を挙げて出て来られ酒宴を開き御祝ひをなし、御客招きまでして居る事でした。若い娘など持つて居る方は、幕に紐を張つて衣裳を飾る、一日に何回となく着物を着替へてゾロゾロ歩くといふやうな状態でゑらい盛んなお祭りだと感心しましたが、今でも頭に残つて居ります。今日ではもう之が見られませんが、それから放生会の済んだ後で又あの松原に小屋掛があつて博多にわかをよくしました。下宿屋のお神さんから面白いからといふのでよく伴れて行かれて棧敷に座つて見て居ましたが博多言葉で演るのでその当時はさつぱり何の事だか判らず終ひの『おとし』がよかつたとか何んとか言つて居りますのを聞いても、之れ又何のことかさつぱり判らなかつたのです。今日ではそれがよく解るやうになりました。所謂習ふより慣れで自然さうなつて来た訳です。

それから大学に通つて来るときの印象ですが、私は網屋から来るのですから、大学の裏へ参りますと唯今の裏門の処に枸橘垣が植てありました。それで皆それを押分けて大学の中へ這入つて来る。すると直その穴を鎖ぐ。又箱崎から来る人達は、この穴を開けて這入る。あつちこつち枸橘垣に穴が開いたことを覚えて居ります。

それから恰度三十八年五月二十七日日本海大海戦で大捷利をした直後ですからその当時捕虜がウンと福岡に来たのですが、その捕虜收容所が唯今の裏門を抜けた所のお寺の辺から其の後の空地にバラツク建でありましたか、私共が朝晩そこを通ると大きな身体の人が汚ない風をして、呑気さうに顔を出して眺めて居つたことを覚えて居ります。それから箱崎の町の事に戻りますがその当時は工学部の建つて居る処、農学部の建つて居る処は全く松原でありました。湾鉄松原停留所のある処の両側の方は唯今スツカリ家が建つて居りますが、元は荒地で墓場でありましたが之は大学建設による町の発展と共に農学部の向ふに移転したものであります。当時私共が名島に遊びに参ります時はその墓場の傍を通り、恰度工学部裏の松原、農学部の松原を通つて段々名島に行つたものであります。そんな風で私共が来た時と今日では箱崎の様子は洵に雲泥の相違であります。私共の参つた当時より数えて三十一年になりますが、今日は非常に變つて居りますが之れは大学の地方に及ぼす影響の現れの一つと嬉しく思ひます。

箱崎には九州帝国大学がある訳でありますから大学の発展と共に大学を中心として箱崎町は今後一層文化的に開発される事と思ひますし、又私の如き長年箱崎に居るものゝ身になつて見ればそれを切に希います、尚ほ又本大学が地方文化の中心として更に指導者の位置に立つものとして益す発展向上しその使命を全ふせん事を切に祈る次第です。永く箱崎に住んで居ります関係から箱崎の事を一寸申上げた訳であります。それから医学部史といふものゝ中に『津屋崎臨海実験所』といふのがありますが、このことに付て一寸一言申上げて置きたいと思ひます、私共学生のとときに櫻井先生といふ教授が恰度新にヨーロッパからお帰りになりましたが、実に潑刺たる快潤な気分のお方で、先生のことを学生達は『おやち』と云つて居りました程、非常に学生を可愛がつた先生であります。先生は胎生学に造詣の深い専門家でありました。

先生は今迄の型を破つて、唯講義を聴いただけではいけないから標本を作つて実験して見よといふことで、私共は解剖教室で色々なことを教へて頂きました。そのとき又発生の事実を実際に見なければならぬがそれには海胆の卵を使ふのが一番いゝといふので、櫻井先生の御骨折で当時津屋崎にあつた県の水産試験所でその実験をさせて貰ふ様な便宜を得ました。そんな工合で私共学生のとときに津屋崎に伴れて行かれまして海胆の卵を潰して、雌雄の卵を顕微鏡で見

後、県の水産試験所移転の議と櫻井先生の津屋崎はいゝ、津屋崎はいゝといふ言葉とが相結んで結局津屋崎臨海実験所といふものが大正三年九月医科大学附属臨海実験所として九州帝国大学の中に出来たのであります。

詰まり櫻井先生が胆煎りで県の方に交渉せられた結果、之れが津屋崎町に交付せられ、それを九州帝国大学に寄附せられたのです。

それで医学部の方でもこれを利用して生理学教室に居られた神田君がその留守番見たやうになつて暫らく居てやつて居りましたが、何うもやつて見ると思はしくないと云ふことになつた。それは農学部設置と共に生物学教室が出来て、動物学に造詣の深い方々が沢山お出でになりました、何うも津屋崎では物足りないといふことで、結局大島教授の胆煎りで外にいゝ処はないかといふことになり他所を探し始めまして、遂に天草に眼を着けて、始めは牛深を候補地と致しましたが、結局牛深に作る事が出来ないので、現在の富岡町に昭和三年四月九州帝国大学天草臨海実験所が出来た訳でありまして、今日では大島教授主任の下に大にその機能を發揮して居ります。そうして津屋崎実験所の方は同時に廃止となりました。その経緯を知つて居りますので簡単に申し上げた次第であります。私の話はこれ位で……。(拍手)

結び

板垣教授

大分時間も経ちましたので、医学部はこの位にしたいと思ひます。

兎に角明治四十三年の十二月に九州帝国大学が設置され、四十四年四月に京都帝国大学を離れて九州帝国大学医科大学になつたといふ事で医学部関係のお話を終りませう、茲に順序書を見ますと次が九州帝国大学創立となつて居ますが、工学部が出来て始めて京都帝国大学福岡医科大学といふものが、京都帝国大学を離れまして九州帝国大学の一分子科大学になつた訳でありますから九州帝国大学創立は工学部と共通の部分になりますので工学部の方に御譲したらよからうと思ひます。

又順序書には医学部の中に温泉研究所がありますがこれは医学部でなく、九州帝国大学直属のものであります、これは小野寺教授の胆煎で出来たのでありまして日本で唯一つのものであります。最初の所長は茲に居らるゝ田原先生ですが、今は小野寺先生であります。まだ色々医学部の方のことでお話し下さることがあるだらうと思ひますけれども、大へん時間も移りましたから、工学部の方に移つたらよからうと思ひます。(拍手)

武藤部長

どうも有難うございました。それでは次に工学部に移ります。甚だ恐縮でありますが座長を荒川先生にお願ひしたいと思います。(拍手)

九州帝国大学の誕生

工科大学創立の頃

座長……荒川教授

荒川教授

工学部の方では、古い点から云ひますと、私が一番古いのであります、こちらの医学部の方に来ますと頭が上りません。今色々のお話を伺ひまして、私の来ました当時のことなど、思ひ起したこと

も沢山あるのであります、今お話のありましたやうに、勅令で九州帝国大学が設置せられたのは四十三年の十二月となつて居りますが、実際に九州帝国大学の開かれましたのは、四十四年の四月であります。それ迄の間は九州帝国大学工科大学といふ一つの分科大学でありまして、私は始めにその分科大学の職員になつた訳なのであります。それは四十四年の一月のことで、四十四年四月一日になりました、従来からあつた京都帝国大学福岡医科大学といふものと、九州大学<sup>マ</sup>工科大学とが一処になりました九州帝国大学といふものが出来た訳であります。それでこの『創立二十五年』といふのは此の九州帝国大学となつた時から起算したものと存じます。一寸蛇足ながら申上げて置きます。

私がこちらへ参りました当時のことは、新聞部の方から御要求がありましたので、自分の経験したことを別に少し許り原稿としてお廻しゝて置きましたが、四十四年の三月迄は私は東京に居りました。

恰度先程石原さんのお話と同じやうに『今度九州に工科が出来るからお前はそつちに行くのだぞ、就いては外国に行つて来い』といふことで、明治四十年十二月から海外留学に出掛け四十三年の暮れに帰つて来ました。そして一時東京に居りましたが、明治四十四年四月の始めに東京を立つて、確四月三日神武天皇祭の日に博多駅に着きました。こちらには石原さんの外には誰も知つたものはありません。唯その当時確か精神学教室に居られた氏原佐藏といふ方が、東京以来の知人でありましたが、その方も今は故人であります。大平さんにはその時初めてお目にかゝつた訳であります。

話は余談になりますが石原君は私の小さいときから知つてゐる人で、石原君は覺へて居られないか知りませんが(石原教授『よく覺へて居るよ』と応酬す)(笑声)同じ小学校に行つて居りまして、先生は大へんな秀才でありましたから、選ばれて早くこちらに来られた訳であります、私が東京に居りました時分に、こちらの教室の電気工事の見積りのことで、何うも高いやうだがこれで高いか安いかといふやうなことを尋ねて来られたことを記憶して居ります。そんなやうな縁故がそのときから、こちらにあつたやうに思ひます。

私が参りますとき、同時に参りましたのは恰度五人でありました。当時学長であつた中原淳藏博士——この方は熊本高等工業学校に居られた人であり、その後故人になられました、その他機械の方では今の名誉教授岩岡先生——この方は名古屋高等工業学校

から来られたのです。それから応用化学の西川名誉教授土木の服部先生とそれから一番若輩の私と五人殆んど同時に着任致しました。

その当時工学部の建物は極く僅かしか出来てゐなかつた、唯事務室だけが出来上つて居たのであります。そこに皆陣取つて九月から授業を始めるといふことで準備をして居りました。詳しいことは新聞に載せて居りますから、若し御覧下されば大へん仕合に存じます。

それから皆さんのお話の通り、第一困つたのは言葉が判らないこととありました。その時間きますと何んでも小使の日給が一日二十錢であつたさうです。先程士族の落ちぶれといふ話がありました。それはどうか分りませんが、兎に角此の日給では若いものは来ない何うしても年老を備ふより仕方がない。それで尚更言葉が判らない、何んとかクサといふやうなことで(笑声)随分滑稽なこともあつたのであります。

それと最初は土地の様子が判らないので困りました、それは昼の弁当を宿から持つて来ればいいのですが、それも面倒なのでこちらで取らうとしても何処から取つていゝかさつぱり分らぬ。今日は箱崎も賑かになりましたが、その頃はまことに淋しい町でして且つ様子が判らぬので、始めの三、四日間は小使をやつて博多の駅弁を買はしてそれで過したやうな訳であります。

あのときに来て居りました建物の中、教室に当らるべき一棟の建物が七月二十五日に火災を出しました。九月から授業を始めると

いふので準備をして居りました、恰度私共の居りました建物で、今の図書館の前に出て居った建物であります。大騒ぎをやりました。併し何うかこうか九月から始められることになりましたが、その当時臨時の教室として使ひました建物が現在学生食堂として使つてゐる建物であります。今第二学生集会所の後ろに在る建物であります。あの建物を電気工学の教室としたのでありまして、下の広い室を実験室とし、二階を二部屋に仕切り一つは製図室兼講義室とし一つを図書室に附しました。あの建物は電気科のものにとりましては非常に記念すべき貴重な記念建物でございますからどうか永く保存して頂きたいと思ふのであります。(笑声)

あの隣りにある学生集会所は少し後で出来ました講堂でありまして、工学部唯一の集会所でありまして、法文学部が出来る時現在の位置に移されるまで十年以上も学生集会所として使つて来たのであります。今と違つて天井の高い広い部屋でありましたが、移転する時に二階に床を附け、下にあんな部屋を造つたのでありまして甚だ殺風景な建物でありました。其の位置は恰度只今で申しますと図書館事務室の前の芝生あたりにあつたのであります、色々さういふことを申しますと切りがございませんが、後は他の方にお話を願ふことに致します。

工学部の教室即ち学科の数は最初は造船がございませんで、土木、機械、電気、応用化学、採鉱、冶金の六教室でありまして、造船学

教室は大正九年に設けられ翌年の四月から授業が開始されたのであります。

最後に私は一つ二つの統計を申し上げたいと思ひます。先づ私は九州帝国大学の創設以来工学部の入学生や卒業生が何の位あつたかといふことを調べて見たのでありますが一寸注目すべき結果が現はれて居りますので、こゝに御披露したいと思ひます。

先づ明治四十四年に第一回の入学生から今年迄の入学生の総数を勘定して見ますと、二千四百七十五人でございます。そうして第一回の卒業生が大正三年に出て居りますがそれ以来今年までの卒業生の総数が千八百七十四人あります。そうして現在の学生数が三百六十六人ある。さう致しますと卒業生と現在の在學生を合せますと二千二百四十人となります。で、これを入学したものに比べますと二百三十五人といふものは、中途で出て了つたといふことになる訳であります。

学生課ではお調べになつて居ると思ひますが、何ういふ原因で出たかといふことを調べたら、可なり面白い統計が出来はしないか——或ひは病氣もありませう、或ひは成績が悪くて出たもの、或ひは在学中に死亡したものもありませうが、このパーセンテージが日本の学校としては少し多いのではないだらうかと思ひます。他の学部の事は知りませんが工学部では恰度全体の入学生の九%半が中途で出たことになりました。

この率はアメリカの大学の工科に於てはもつとひどいのでありまして卒業生の数は入学生の僅かに四三%で半分以上は中途で出て了ふ。これは主として入学するときの資格を十分調べないで入れるので、成績が悪くて出されるのが多いからださうであります。日本のはさうでなく自然出なければならぬやうな状態になるのでありますから、私は何うか将来に於てこのパーセンテージが、もつと減るやうにありたいものだと思ふのであります。学生課などでも一つお考へをお願いしたいと思ふ次第であります。

もう一つ卒業生中、死亡したものが何の位あるかといふことを調べましたが、只今申しましたやうに卒業生は千八百七十四人でありまして、其の中百二十一人死亡して居ります。この数字は或は一、二名の相違があるかも知れませんが、大概は正確であります。即ち其の割合は恰度六%半許りになつてゐます。尚各科に分けて見ると却々面白いので一番多いのが機械科で七%半、一番少いのが土木科で四%あります。これは職業柄に或は関係があるかも知れませんが、そんな風なことを勘定して見ますと、相当興味深い問題と考へましたのでこれは今夜の話題として与へられてゐる『本学の将来』といふ事に亘る事項であります。この機会に発表させて頂きました。

今夕は工学部からは、甚だ出席者が少うございまして、私の外に山口君と桑木君とが来て居られますが、山口君は最初から居られた

方であります。私よりは三ヶ月位遅かつたと思ひますが、私はこゝに皮切りをやりましたので後は山口君にお話を願ふことに致します。

(拍手)

山口教授

今夜のプログラム中に工学部の創立の趣旨及び経緯といふ事が挙げてありますが、多分荒川先生からお話があるだらうと思つてをりました処、一足飛びにカットされたやうであります。私もよく存じませんが、自分に関係することで甚だ恐縮であります。少しく補足させて頂きたいと思ひます。

私は工学部が出来るに付て、議會を通過したといふやうなことは当時まだ学生であつたからちつとも知りません。工学部に関係した人間として、外国に一番先きにやられたのは、今京都の大学に行つて居ります中澤良夫君だと思つて居ります。中澤君は明治三十九年に卒業して翌四十年の夏迄には已に外国に行きました。

私は四十年に卒業したのでありますが、その年も好景氣でありましたが私は卒業しましても実は何んだか就職する気になれない。家でももう少し勉強して居つてもいゝと云ふし、先生も『お前はさう急がんだらう学校に残つて居れ』といふことで、大学院の学生といふことで、七月に卒業してからブラブラして居りました。処が十月になりまして今は故人となつた斯波先生から『九州大学が出来るから外国に行け』といふ話を受けまして当時文部次官の福原さんにお

目にかゝつたのですが、私は石原さん見たやうにゑらいことは言はなかつた。(笑声)

今でも覚えて居りますのは、行きますと福原さんが顔をニユツと突出した、ゑらい勢ひであつたから自分は後へ下りましたが恰度中澤君のお父さんと二人で話をせられて居りましたが『お前行くなら何をやるか』と言はれると、横から中澤さんは『機械のものは工場のことが一番先に入用だから工作の方の事をやつたらよからう』と言はれた。すると福原さんは『その方はもうあるから、お前の好きなことをやつて来い、兎に角九州に行くのはこれから三年先のことだから三年間やつて来い』といふことで、十一月の二十六日に出帆して行つたのであります。それから先程お話のありましたやうに、四十四年の六月に帰つて来まして、七月に教授の任命を受けたのであります。

あちらで勉強して居りますと、たしか四十三年ですか東京から敷地の凶面が来た、そのとき荒川先生もドイツにお出でのとときですが、大体建物を何う建てるかといふやうなことであつた。小野教授その他数人も一緒にその当時ベルリンに居りましたから色々話をして、大体敷地の真ん中に十字路を造り機械と電気がその四分の一角を取るとか、或ひは採鉱冶金を何うするか、詳しいことは覚えて居りませんが、兎に角案を立てたのであります。

話は前後致しますが、工学部を建てますに付ては、古河男爵が百

万円金を提供して、これで大学を造つて呉れといふことであつたといふことを聞いて居ります、私は六十何万円かで工学部が出来たやうに聞いて居ります。敷地はたしか県から提供しましたのでせう。よくは知りませんが文部省で百万円あるから六十万円です工学部、四十万円です理科大学を新設しやうといふことで、東北大学と九州大学を造ることを決めたといふことを聞いて居ります。

それで古河から寄附して呉れるので、小さい建物をチヨイ／＼建てるのはいかんから、中央に一つドカンとした建物を造つたらいいだらうといふ事になりました私共で前申した様な案を立てましたけれども、創立委員の方ではそれを採らなかつたのであります。

そして大正十二年十二月に焼けました前の煉瓦造の建物が出来たのであります。出来上つたときは、カーテンが緑、煉瓦が赤、窓枠が黄といつた具合で、クリスマスケーキのやうに綺麗であつた。歴史は繰返すと申しますが、焼けました後に又何しやうかといふ相談がありましたときにも以前の説が出来まして、真ん中に道路を置いて敷地を四つに分けてやらうといふ建築案を出しましたが、元の通りにして呉れといふので今の建物が出来た訳であります。

建物のことはそれ位に致しまして私の参りましたのは七月十五日でありましたが、恰度祇園の祭りが済んだ処で惜いことをしたといはれたのであります。そのとき既に来て居られたのは、荒川先生のお話になつたやうな方の外に、宇佐美、伊東、中澤といふやうな人



達であります。それで十人以内であつたと思ひます。私もこちらへ参りました当時は、一向様子が判りませんので荒川先生に大へん御厄介になりました。無論独身でしたが宿屋に居つても不便であるからといふので、西中洲に家を借りて奥さんについて来て頂いて色々なものを買つたことを、今でも有難く思つて居ります。

恰度七月二十五日に火事がありました、私は学校に居りましたが恰度昼頃のこと、今の事務所の内の食堂で飯を食つて出て来ると、火事だといふのでバケツに水を一杯入れて走りかけたが、チャブくとして水が滾れるので水をすて、空バケツを一つ掲げて走つた。

(笑声) 行つて見るともう火は廻つて了つて居つた。今の学生集会所を電気科にしたいといふのも、さういふ結果であります。そのときの定員が、私の記憶では土木科が十五人、機械が二十五人、電気が二十人、応用化学が十五人、採鉱が十五人、冶金が十五人で合計百人と思つて居ります。処が焼けてこれだけ容れられないので中原学長が機械の二十五人は多いからといふので十五人にして了つたやうに記憶して居ります。詰り定員が九十人で、何処でも他では機械が多いのに、九大では電気が一番多いのは、そこにさういふやうな経緯があつたのです。

中原学長は非常に几帳面な人で、九月から愈々学校が始まるといふのでその前日即ち九月十日に各部屋を廻つて見るといふ事になつて私も一緒に一と通り建物をついて廻つたことを覚えて居ります。

そのときの建物は、先程のお話がありましたやうに今の事務所の横が今採治になつて居ります後の第三分館が建ち、第二分館即ち応用化学実験室、その隣りの煉瓦で電気と機械との実験室の建物がまだ出来て居りませんが、第一分館も前申す通り焼けて、空地にはズラツと雑草が高く生へて居りましたが、それを残して周囲にグルリと建物が出来ました。中央の本館の後に建物を造りますときに写真を撮りましたが、それは今日持つて来てゐません、何れ大新聞にでも載せたいと思つて居ります。配置等はそのときに少し書き加へたいと思ひます。

まだ申し上げたいことはありませんが、それ位でカット致しまして、その当時私知つて居ります福岡市といふことに付て少し申し上げたいと思ひます。私が福岡へ来たのは明治三十八年の夏でありまして、栄屋へ泊りました。友達と一緒に朝早く起きまして、香椎迄歩いて行つた、そのときは無論電車なんかありません。朝暗い中に出たやうに思つて居ります。そうして栄屋の通りを真つ直に東の方に向つて行きましたが、途中で道を間違へて了ひました。

今考へますと川端の突き当りで右に曲るのを左に曲つてズンズン行きますと遊廓の中へ這入つて了ひました。所謂柳町です(笑声)。恰度午前六時か七時頃の遊廓でありますから森閑としてゐる。二人は遊廓といふことを知らないから、そこを突き抜けて了つたら川であつたので困つた。仕方がないから川の中へ飛込んで石堂橋の処へ

上った、それから東公園に這入つて、龜山上皇の銅像や日蓮上人の銅像を見て有名な医科大学とはして筥崎八幡に詣りました。海岸の石灯籠を見てそれから進藤先生のお話の網屋を通つたと思ひます、工学部の処は松ばかりで一時行く手に迷ひました。多々良川はその時分は渡しでありました。それから何う行つたか香椎に行つて汽車で帰京しました。これが私の博多に於ける一番古い記憶であります。

それから 天皇陛下の 行幸といふことが出て居りますが、これは福岡に大演習がございまして 陛下がお出でになつた。これは大正天皇であります。その 行幸がありました時、工学部に臨幸せられたのであります。恰度本館が出来た後であります。一番大きな貴賓室の中に玉座が出来て吾々に拝謁等があつたことを記憶して居ります。その他のことは新しいことですからそれ位にして置きます。(拍手)

それからもう一つ乗物の話がありました、先程人力々々といふお話でしたが、私共来しましたときは電車が箱崎迄通つて居りました。箱崎迄電車で来まして、それから神苑と学校との間に僅か三尺位の道がありました、枳殻か荊かの間を辛ふじて、今の小学校の前の処へ出ると田がありまして、それから人家の裏の便所の処を通りまして、通用門の方へ出ます、これが順路になつて居りまして、小野教授は潔癖な人でありますからあの便所を何うかして貰へないかといふやうなことを言はれたことがあります、一つ加へたいことはそ

の時箱崎町の人達が、恰度工学部が出来たので先生方をお招きして一席設けたいといふことを申出たさうであります。処が中原学長はそんな馬鹿なことではない、何もお前達に招んで貰はんでいゝ、併し何か吾々が喜ぶやうなことがしたいのなら、その金であの田の中の道に砂を入れといふことで、そこへ砂を入れて二尺位の幅の道が出来たのであります、暫らく経ちますと埋りますから、大学からガラを持つて行つたりして苦しんで居りました。電車が前に通じやうになつたのはズツと後のことであります。

医科の先生は人力で威風堂々とお出勤になりましたが、吾々は電車を通つたのです。(笑声)式の時には皆シルクハットでありました。シルクハットを着て電車の中でゴツ／＼ぶ突かつて困るので、式の時だけは車に乘りました。(笑声)

唯一人工学部で岩岡先生が頗る振つた帽子に簡単な洋服を着てオートバイに乗つて来られた、その頃オートバイとは云はなかつた、何んと云ひますか自動自転車と云ひますが、何んと云ひましたかねオートサイクルですか、エライ音が致しまして町の人の注目を惹いて居つたやうであります、そのときの頃でせう自動車福岡県にたつた十台あつたといふことを覚えて居ります。

それで一番は何処、二番は何処といふやうな訳で、十番は確伊藤傳右衛門氏といふことを記憶してをります。一寸思ひ出しましたのでそれだけ付け加へて置きます。(拍手)

荒川教授

時間が経つて居りますので、一々皆さんのお話を願ふと遅くなると思ひますが、工学部は出席者も少うございますので、桑木君に簡単に……桑木君は最初は講師としてお出でになつた方でありまして、明治専門学校の教授でありましたが、後こちらへ来られたのでありまして、初めは物理をやつて居られたと思ひますが、今は力学をやつて居られます。従つて山川総長と御昵懇であつたと思ひます。何か一つ……。(拍手)

桑木教授

山川先生から命ぜられて私が工学部理科教室の初めに關係した頃の話 simplicity に申し述べます。山川先生は明治四十四年四月に九大総長に任せられました。今迄皆さんの御話の如く、九大創立は明治三十九年頃から準備を進められたのでありましたが、山川先生はさういふ初めからは關係せられず、愈よ開学に迫つてから総長就任の交渉を受けられたやうに察せられます。といふのは、この四月の初だつたかと思ひますが、先生が私を呼ばれ

今度九大総長を引受けることになつたが、夫れに条件をつけた。

九大は医工二分科が出来るが工科だけが新設で、其学科及教授は既定である。然し今工科大学の手本は東京と京都とのであるが、元來工科は理科の応用であるから、工科の学生は基礎の理科を十分にやらなければならぬと思ふのに、其点現在の東京の工科大学は理科

と離れ過ぎてゐるやうに思ふ、京都の理工科は濱尾さんの案で、其辺も考慮したのであるが、九大では先づ最初に工科新設と共に其中に理科の講座若干を設けたいといふ、是が希望条件であつたが幸に容れられたといふ御話で、其後教授何名助教何名学生何名に就て、之に要する教室並に実験室の略図を造れ

と命ぜられたりして、即ち九大創立に際しあらまし工学部の膳立てが出来たところへ先生の御考えて理科の教室が加はつたのである。

夫れで先生も他の学科や講座に対してはそんな事もなかつたらうと思ふが理科の学科の準備については種々心配されて九月の開講までに、さういふ御注意を払はれた御手紙を四五通下さつてゐます。それで兎も角今の工学部の第四分館の理科教室が出来ました。

其後、東京大学其他の工科の中の理科は昔とは大に變りました。

この山川先生の案の影響が少なからずあつたと云つても差支ないと思ひます。

こゝの理科教室も御蔭で其後多少の発展もあつたと思ひますが、当初の山川先生初めの御考へ等を追懐すると、甚だ満足で偏に慚愧に堪へません。(拍手)

結 び

荒川教授

今迄の工学部の中で、私共に一番大きな印象を残してゐるのは、何んと云つても大正十二年十二月二十六日の古河氏の寄附によつて

出来ました本館の焼けたこと、思ふのであります。此等の事に付ては色々お話の材料もあると思ひますが、大分時間が経つて居りますので差し控へて置ませう。

此の本館は煉瓦造でありましたが内部の間仕切は木造でありまして、可なり大きな建物でありましたがその一部分から火が出まして、僅かな時間の中に内が全部焼けてしまつた、それで火元の附近だけは少し煉瓦がいたみましたが、外の部分は外側など余り障害を受けないで残つたのであります。

その焼け残りの材料を使ひまして只今の本部の建物が出来た訳であります、それ故唯今の本部の建物の外観は殆んど元の本館その儘の形でありまして、唯建坪が小さくなつた事や、屋根が平屋根になつて居る事——前は傾斜した屋根でありました——それから床が今はコンクリートであります、元は木造であるといふやうなことが違ふだけで外観は前と余り變つて居ないのであります。窓枠は萌黄色で煉瓦が赤で青い松林との対照が美しいといふので褒める人もありましたし又貶す人もありました。

それから今夜のプログラムに『工学部史』と書いてあります中に、天皇陛下の 行幸が大正五年十一月とありますが、之は福岡地方で行はれた特別大演習の時の 行幸であります。それから 皇太子殿下——即ち 今上陛下——の 行啓は、恰度大正九年に福岡に工業博覧会がございました時、皇太子殿下がまた高等学校の御課程を

御とりになつてゐらつしやるときでありまして、御教育係の濱尾男爵が御供でこちらにお出でになり博覧会を 御覧になり、又大学にも 行啓になつたのであります。又『医学部史』とある中に、皇太后陛下の 行啓が大正十一年となつて居りますが、之は医学部ばかりではなく工学部の方にも、お出になりましたので、大正天皇御不例に就いて御平癒御祈願の為香椎宮に 御参拝の序に 行啓になつたのであります。

尚ほ又大正十二年には、久邇宮良子女王殿下即ち今の 皇太后陛下が御両親の宮及び御妹宮殿下と御一緒に本学に 御台臨遊ばされて居られます。詰り九州大学は 先帝陛下 皇太后陛下、今上陛下、皇太后陛下の 行幸啓を辱なふした次第でありまして、吾々の大学にとつて無上の光榮でありまして御同慶の至りであります。

工学部の巻は先づこれ位で御免蒙りたいと思ひます。(拍手)  
武藤部長

色々充実したお話を承ることが出来まして、諸先生に厚くお礼を申し上げます。先程お話がございました工学部の建物が出来る前に山口先生がお撮りになりました写真といふのは、全部を合せますと工学部の建築の模様もすつかりわかる訳でありまして、洵に貴重な写真と思ひますが、これは九大新聞に貸して頂いて掲載させて頂くことになつて居ります。

今迄の医学部、工学部が文字通り二十五周年に當る訳でございます

して、所謂星移り歳変つて色々吾々にとつて興味深い又裨益する話を承つたものであります。

それでこれから農学部、法文学部のお話を承はりまして、次に順次図書館、学生課の方のお話に移らせて頂きたいと思ひます。尚ほ順序書きの中には歴代総長といふ一項がございますが、これは実は諸先生方にお願ひ致しまして、お一人宛受持つて原稿として書いて頂いて居ります。

語り初代の福岡医科大学の総長であられた木下先生に付ては板垣先生に、九州帝国大学の創立以後では山川先生に付ては桑木先生に、眞野先生に付ては山口先生に、大工原先生に付ては満田先生に、それから松浦先生に付ては法文学部の三田村先生に、高山先生に付ては医学部の藤原先生にお願ひして居りますので、この分は今夜のお話としては略したいと思ひます。

このへんで四、五分休んで農学部へ移つて頂きたいと思ひます。  
(拍手)

農学部の十五年

座長……満田教授

ブローグ

武藤部長

ではこれから農学部の方にお願ひ致します。満田先生に座長をお

願ひ致したいと存じます(拍手)。

満田教授

それでは甚だ僭越でありますけれども、私が役目上進行係を勤めることに致します。御承知の通り農学部は、本年の春に開学十五周年を迎へまして、恰度今年が開学十五周年に当る訳でございます。

詰まり漸く元服した程度で、大学全体から申しますと、人間に譬て云へば三男坊と云ふ訳でございます。今夕は医学部、工学部の方々から……殊に医学部では陣痛時代のお話から承はりまして(笑声)吾吾三男坊として洵に長男、次男の方々の御苦心談なり、又得意の処をお聞かせ頂きまして、洵に吾々の使命の重大であるといふことを痛感した訳であります。農学部十五周年記念式挙行の際にも矢張り座談会をやりまして、その話の様子は当時新聞部の御厚意によつて五月の初めに発行されたものに沿革その他のことも含めて載つて居りますので、大体それによつて頂くことが出来ると思ひます。併し今日は又附け加へなければならぬ点もあらうと思ひます。

尤も法文学部の諸先生方以外の医学部工学部の特に今夕御臨席になつて居られる方々は、農学部の創立に關しては却つてお詳しいかとも存じます。併し矢張りお話致しませんと、吾々の語り義務を果すことが出来ませぬから簡単ながら、最も古く学部に關係せられました久保教授に創立のことをお話願ひます。更に演習林のことに付ては植村教授にお願ひしたいと思ひます。

尚こゝに皆さんに御訂正をお願いして置きたいと思ひますから、その点を私から申し上げたいと思ひます。それは新聞部の方が間違へられてこゝに書かれたものと思ひますが、今夜のプログラムに『彦山生物学研究所』といふのがあります。これはこの文面から見ますと農学部附属のやうに見られますが、江崎教授が監督となつて居られますが農学部のものではありませんで、九大本部直属のものであります。これはこの二十日に漸く開所式をやつたばかりでありまして、高山先生が病氣の爲め私が総長の代理として開所式に参つたのであります。

之は既に早くから高千穂男爵が昆虫学に付て非常に興味を以て研究せられて居りましてあそこに昆虫学研究所といふものを一人で造られまして、その当時もう故人になつて居りますが三宅博士、桑名博士なども研究を始められて、相当標本も集つて居るのであります。大体それが基になつて高千穂男爵が土地を寄附せられ、それに大阪精鋼所長をして居られます、京都出身の中山鋭治さんといふ方が建築費を寄附せられて、昨年から工を起しまして今年出来上つたやうな訳であります。

こゝは御承知の如く夏の避暑に大へんよい所でありまして、二、三人お出でになつても宿泊せられるやうになつて居ります。夜具なども新しうございまして、宿屋に行くよりも大へんよろしい。(笑声) さういふ訳で決して農学部のものではありませんから、お出でにな

りましてお泊りになることは、ちつとも差支ないと思ひます。(笑声) 又宿屋にも余り遠くありませんから、食事なども宿屋から運ぶことが出来ます。殊に法文学部の長先生が毎年行つて居られるさうで、殆んど長先生は彦山村の人のやうに、村の人から非常に信頼されて居らるゝやうに見受けれます。そんな訳で長先生は一軒家を借て居られますので、何時でも誰か泊つてもいゝといふことを、この間も言はれて居りましたから、生物学研究所の方でもよし長先生の方もいゝと思ひます(笑声)ので一寸訂正旁御紹介して置きます。時間も大分経つて居るやうですから、早速久保教授に創立の話をして頂きたいと思ひます。(拍手)

#### 農学部事始め

#### 附けたり農場のこと

久保教授

それでは僭越であります但し申上げることには致します。満十五歳の未成年であります農学部の生れたときからのことを申上げやうと思ひます。

只今私が一番古いと云はれましたけれども、実は大正十年に農学部の授業を始めたのでありまして、そのときには瀨瀬教授が私より先きに来て既に授業を開始して居られました。それで瀨瀬教授にお話を願ふと一番いゝのですが、今日お見へになりませんので、その次に参りました私がお話をする訳であります。

尚ほ只今は退職されて東京に居られる加藤茂苞教授は無論私達よりも前から居られたのであります。先程も申しした通り農学部は大正十年の春から授業を開始したのであります。それより数年前に九州に農科大学を置きたいといふことを、官民の間では問題にされたやうであります。特にこの九州各県の官民の方々が、その希望を関係当局に申し出られたやうでありまして、当時鹿児島でも熊本でも無論福岡でも、自分の処へ農科大学を設置されたいといふやうな申し出がありまして、運動をせられたさうであります。

結局福岡の運動が強かつたのでありませうし、又既にその当時医科大学、工科大学がありましたからして、ここに置くことになつた訳であります。その決定したのが大正六年であつたさうであります。

そのときに福岡県では相当大きな金額を寄附するといふことになりました……何でも百三十五万円か寄附をするから福岡へ農科大学を置いて呉れといふ話が出来まして、政府でも肚を決めて、ここに置くことになり、大正七年の予算にその経費を計上したのであります。恰度六ヶ年計画で大正十二年迄かゝつて完成するといふ仕組みにしたのであります。その予算が通りましたからして、早速用地の買取等に取りかゝりまして、用地は只今の敷地で主として国有地でありましたが、一部民有地もありましてそれを買収して学部を建設することに決定し、農場は専ら県の方で斡旋して呉れまして、原町に設けることにし、主としてこれは民有地を買上げたのが現在の農場

であります。

そうして大正八年頃から建築の準備にかゝり、それから農場の地区の整理といふやうなことをしたのであります。で、愈又大正八年には九州帝国大学に農学部設置の勅令が発表されたのであります。そのときに帝国大学令の改正により今迄の医科大学、工科大学と云つたのをそれ〱医学部、工学部といふ名にしたのであります。

そう致しまして大正九年に農学部に先づ農学科を置くことが決つたのであります。大体農学部には農学科と、農芸化学科と林業学科の三学科が存在して居るのであります。その中の第一の農学科を置くことを九年に定めて、その授業は翌十年の四月からといふことにしたのであります。そうしてその頃既に教授となるべき人の選任があつたやうであります。

それからその翌年の大正十一年に、農芸化学科、林学科の二科が出来まして学生を募集しましたが、何れも少数でありました。その当時物価が非常に高くありまして、予算面の金では、とてもいゝ建物は建たないので、皆は非常に不満でもありますし、又学部長なども余程困られたやうであります。本田学部長は建物はさう立派でなくてもよい、内部の設備——殊に研究に必要な機械器具、図書を十分に集めなければならぬ、それらのものを集めるのに力を注ぐやうにと言はれましたので、吾々もその精神で建物はお粗末でも出来る限り内部をよくしやうといふことに力を注いだのであります。

当初の教授の方々は、皆凡そ同年輩の人で、自分の部屋なり自分の研究室もなかつたので、暫くの間は今の事務室の一部の部屋に雑居致しまして、愉快に暮したのであります。その当時の色々の面白い話もありますが、それは省略します。それから後教室が出来上りますと教室に分散致しまして、それだけの研究室で仕事をやるやうになつて、年を闊みしまして茲に十五年といふことになつたのであります。

この十五年の年月の間に、吾々の学部にて養成致しました処の学生は、農学科が二百九十七名、農芸化学科が二百六十七名、林学科が百十七名、合計六百九十二名といふ数に達して居ります。十五年間に六百九十二名でありますから余り多い数ではありませんが、併し卒業生はそれだけ相当地位に就いて居るのであります。吾々も先づ今迄の処は無事に過して来たと思つて居るのであります。で、既に先頃十五周年記念式も挙げましたので、吾々はこれを一期と致しまして、更に今後発展を期すべく努力したいと——斯う考へてゐる次第であります。

是より先き、創立委員として三名の任命を見たのでありますが、その三名のお方々は、今は既に故人になつて居られますが、元の東京大学の総長であられた古在由直先生、それから東京大学の教授をして居られ後朝鮮総督府勸業模範場長となられまして、朝鮮農業開発の為に非常な力を注がれた本田幸介先生及び東京大学の林学の先

生であられた河合鍾太郎先生のお三人で、色々学科のことや教授の詮衡といふやうなことに、お骨を折られたのであります。

吾が農学部がここに設置せられることに定まりましたときは、歐洲大戦の終り頃でありまして愈々始めるといふときは歐洲大戦の直後でありました、御承知の通り世界の各国はあの戦争の影響を受けて非常に恐慌を來たし、吾が国に於てもその恐慌の余波を受けまして、国内の産業なり或は經濟方面に色々の混乱を來たしました。

吾が農学部創立委員の先生方はこの際日本の農業も大に發展又改良しなければならぬ。それには大に農学の研究をやつてその研究の結果を応用して農業の發達を圖らなければならぬ。就てはこんど新しく生れる九州大学の農学部に於ては、大にこれに貢獻するやう奮發して呉れといふやうなことを、吾々に御仰つて下さつたのであります。そして教授となる人々に、新進氣鋭の方々を選任されたやうな次第であります。尤も私は唯の埋草中継ぎの役目を仰せつかつて参つたのであります。

本田学部長は大正十年の二月に任命されたのでありますが、私は大正十年九月に参りました。そのとき既に瀧瀬教授が居られた。それから間もなく中田教授が外国から歸つて來られ続いて奥田教授、大島教授なども帰任せられましてお互ひに創設に関して色々な設備——或ひは建築のこと、或ひは機械や圖書の購入といふやうなことに、出来る限りの尽力を致した次第であります。



当初建物として出来て居りましたのは、只今の事務室と実験室とで生物の教室は間もなく出来上りました、それだけで授業を開始するといふことでありましたがそのときにはまだ先生も揃はぬし、学生の数も極めて少く農学科に入つて来たものは学生が僅か三名と専科生が七名で双方合せて十名でありました。その位でありましたから、設備の不十分な処でも、どうかこうかやれたのであります。設備が不十分でありましたから却つて奮発したやうであります。又先生と学生の間も非常によく親しみまして、お互に研鑽を進めるといふことで洵に親密な気分であつたのであります。

甚だ不用意で、纏つたお話も出来ませんので、ズツト飛ばしまして各教室のことの中で一つ申し上げたいのは、農芸化学教室のことであります。これは大正十二年に建物が出来たのであります。不幸にして恰度私が学部長として在職中の昭和六年に焼けて了つたのであります。私が火をつけて焼いた訳ではありませんけれども（笑声）何が原因かハツキリ致しませんけれども燃えたのであります。洵に申訳ないことを致しましたが、漸くその後学部長並に総長等の御尽力によりまして、本年から復旧致すことになりまして大へん有難いことと思ふて居ります。それから演習林のことに付ては、創設当初から演習林長を長らしく居られた植村教授に、お話を願つた方がよからうと思ひます。

附属農場のことに付て一寸申し上げて置きます。

これは大正七年から用地の買収を致しまして、先程申しました通り先づ第一に地割や土地の整理を致しました、初代の農場長には加藤さんがされたのであります。私は大正十二年から昭和五年迄致して居つたのであります。私の農場長をやりましたときは、まだ土地の整理が漸く出来たばかりでありまして、詰まり地ならしのやうな役目をやりまして、排水をよくするとか土を肥やすとかいふやうな荒仕事だけをやりましてまだ教授の実験研究といふ必要な役目を果たす迄には參らなかつた、又学生の実習にも充分これを利用することも出来ませんでした。

一体農場設置の建前といふものが収入支弁の形式になつて居る。収入を挙げて、その収入金の中で支出して行くといふやうな建前になつて居る。処が農場の経営といふものは困難な仕事でありまして、個人経営でありまして農場で挙げた金でやつて行くといふことは仲々難しいのであります。況んや外の使命を有つて居る処の学校の農場等に於ては、それから挙げた金で全体の経営をやつて行くといふことは出来難いことであります。それに拘らず上の方からは収入を要求せられるといふやうな訳で、初めに非常に苦しんだのであります。私が退きましては後の農場長方の非常な御努力によりまして、農場の収入も年々増加して来るやうになり教授の実験研究等にも、これがよく利用せらるゝやうになり、又学生の実習も大へん都合よくなりまして、大学の農場としての面目を發揮して来てゐると

思ふのであります。

殊に今回農場長になられました丹下教授が、それらのことに付て非常に努力せられて居るのでありますから今後我が農場は他の大学の農場に劣らない立派な農場として、その使命を発揮することが出来るものと期待して居るのであります。余り用意して居りませんので、私の話はこれ位にして置きたいと思ひます。(拍手)

満田教授

色々詳しいお話をさせて頂いて有難う御座りました。次に中田教授に何かお話を願ひます。(拍手)

中田教授

私は農学部創立の初めから在任した一人であるが、創立当時のことは只今久保教授から詳細述べられた通りで、寸分加言の余地もない程であります。

唯この際蛇足をつけるならば農学部の誕生前言は、胎児時代の農学部の状態であります。

このことは私が農学部の創立委員の一人であり、又初代の学部長であつた本田幸介先生の下にあつた関係上、当時先生からよく聞かされたものであります。多分先生の創立委員となられたのは大正七年四月と記憶してゐますが、先生は朝鮮にあつてこの計画に当られ、時々福岡からは坂根事務官などが態々見えられたやうでした。その内で今尚私の記憶にある事は久保教授も述べられた鹿児島と熊本と

の候補地争の経緯やら、又この学部の特色と言ふやうな点でした。

先生の考へでは北には札幌に北海道大学の農学部があり又中央には東京に東京大学の農学部があつてそれ、特色を持つてゐるが九州のこの農学部は是非とも朝鮮、台湾を対象とした農学部であるやうとの意図であつたやうです。これは先生が朝鮮に長い体験のあつただけに一層この念が深かつたやうに思はれました。

尚先生が当時口癖に言はれたことは、これまでの大学は札幌と言ひ東京と言ひ何れも昇格の大学であるが、この福岡の農学部は初めから大学として創立されたもので、所謂因襲と言ふやうなものがなくこの将来には多大の自信があると言ふことでした。この農学部も本年で丁度十五年を算えることになりその間には多少の変化を見たものゝ矢張りこの点に於ては一種の特色のあるやうに信じてゐます。(拍手)

武藤部長

農学部の創立当時のこと、その後の沿革に就て詳しいお話を伺へてまことに有難う御座りました。所で農場のお話が段々と出ましたが、近年迄毎年春になると農場から苺摘みの御招待を受けてをりましたのに、この頃ではとんと御招待がございませぬが……。実は毎年心待ちに御招待をお待ちしてゐるのであります。……(笑声)。私共は毎日農場の牛乳の御厄介になり夏になると『サワヤカ』の御厄介になりますのに、苺だけはどうも……。 (笑声)

丹下教授

私の話は速記は要りません……。

(以下数行速記中止)

武藤部長

どうか速記して下さい…。(笑声)

丹下教授

もう一つ苺摘みの話がございましたが、どうもこれも他の方々からも時々その話を承はるのですがその度毎に実はお断りして居るのですが、こゝに御列席の方々で、さういふやうにお考へになつて居る方があるかも知れませんが、序にお断りさせて頂きます。

こゝにお出でになつて居ります久保教授時代におやりになつたこととでありまして、それからなくなつたのは私の責任ではありません。ずつと前からなくなつて居りましたので、やるかどうかといふことでありましたが、甚だ遺憾ながら一寸復活は困難だらうと思ひます。と申しますのは、久保教授はその当時もお出でになりましたが、畑に段々果樹なんか多くなりまして、苺を作る余地がなくなりましたので、それを復活することは、これから先きは難しからうと思ひますので、不悪御諒解を願ひたいと思ひます。

併しさう申ししても如何にも農場に障壁を構へて、皆さんのお出で下さることを、歓迎しないかのやうにも見えますが、決してさういふ訳ではありませんで、実は一人でも多くお出で下さいまして、

農場を御覧になつて頂きたいと思つて居るのであります。殊に昨今は天気もよろしうございますし、一日の御清遊をあのへんでして頂いたら、御家族伴れでお出で下されば御案内致したいと考へて居ります。(拍手)(註、丹下教授は現在の農場長である)

武藤部長

実に口卑しいお話をはさみまして、まことに恐縮致しました(笑声)。

北は樺太南は台湾

演習林経営の苦心談

満田教授

次に演習林に就いて植村教授のお話を承はらうと思ひます。(拍手)

植村教授

では私が当初演習林に関係して居りましたので申上げることになります。

演習林も農学部の新設から言ひますれば十五年になるのでありますけれども、これは戸籍上の年齢でございますまして、実際の年齢は二十五位になつてゐるのであります。詰まり総長の許で本部に於て色々頭痛の種であつたやうな形で彼此れ十年ばかり無籍の状態にあつたのであります。(笑声)

この演習林は山川総長が、先づ大正元年に、東京、京都、九州と三つの大学が共同の工作によつて、朝鮮に十萬町歩ばかりの演習林

を手に入れたのであります。朝鮮の山では比較的いゝ山林であります。林相が非常に荒廢して居りますが、朝鮮ではいい山だといふことで大学の演習林になつた訳であります。

交渉の成行のことは私知りませんが、書類なんかを見又聞く処によりますと山川総長の御意嚮もハツキリ判つてゐるのであります。詰り九州が地理的に特殊の関係があるからして、朝鮮、台湾といふやうな処では未だ国有林野の整理が出来ませんので、大学として土地を貰ふことは比較的容易であるといふやうなお考へであつたらしいのですが、兎に角大学は政府の支出金と資金の収入とによつて將來發展しなければならぬといふやうなお考へであつたやうに、其ときの趣意書にも書いてあります。

処が時の総督寺内大將は非常に山林の保全に熱心な方でありまして、朝鮮半島の緑化——植林といふことを非常に熱心に考へられまして、大学に荒廢の山林を預けることは、先づ病院に病人を預けると同じことであるからそれは結構であるといふので、思切つた面積を大学に渡されたのであります。

それが大正元年でありまして、山川総長が着任匆々演習林の設置に努力したことがハツキリして居る訳であります。

その次は眞野総長であります。大正二年に台湾に二千町歩の演習林を設置せられたのであります。台湾には各大学とも演習林を持つて居りまして、京都の如きは非常に多くの面積を持つております

が、九州が一番少いのでありますけれども、大体大学が演習林を持つといふことは、明治から大正の初めにかけては、さう困難ではなかつたやうな事情もあつたらしいのであります。と申しますのは、その当時は山林の価値といふものがありませんで、植民地では寧ろ山林を世話して呉るならば喜んで管理させやうといふことが急務であつたやうでありまして、此方から貰ひに行くこと喜んで御馳走をして引渡したといふやうな具合でございました。(笑声)それで比較的容易に大面積の演習林が大学の手に入つたのであります。樺太は三年に二万町歩——これは各大学共……詰まり八万町歩ばかりの山林を東京、京都、北海道、九州の四大学が分けて貰つた訳であります。

以上三つのが植民地であります。これが農学部が出来る十年程前に、手に入つた訳でありますから、これを管理して行く上に於て可なり総長は苦心されて居つたやうであります。農学部が出来まして早速引渡を受けましたけれども、演習林といふ名から言ひますと、台湾、樺太、朝鮮といふやうな処では、とても一年を通ずる学生の演習にはならぬのであります。内地特に福岡附近でその目的を達しませねばなりません。

そこで農林省に交渉致しまして、この附近の土地を物色して、粕屋郡の篠栗に三百二十町歩、生の松原に早良演習林として五十五町歩ばかり——生の松原には御承知の通り医学部の病院が設けられ

て居りますが、この二つの森林は農学部が設置されたから、実習の用に供するといふ為に貰つたのでありますが、これらに対しても移管して貰ふ為には、非常に苦心されたのでありまして、この当時政府には国有林野の整理の議がありまして其国有財産整理委員会は大学が大面積の演習林を持つて居るといふことは、実際に於て演習の必要以上であるといふ決議が出来まして、千町歩に縮小するといふことで種々問題が持ち上つた為めに総長は非常に困つて居られたが、それに対して盛んに抗弁をやつて居つたのであります。又何れの植民地も年を経るに従つて、大学に大面積の山林を占領されて居るといふことは、地方財源の上からも困るといふやうなことで、昔は山林の価値がなかつたから喜んで大学に呉たものですが、無論不便な処で急速に手の着けられないやうな処を頂戴して居るのであります。が殊に樺太の如きは北緯五十度過ぎマツの処に持つて居りまして、手に入つたときでも誰も行つたものがなかつた。放つて置いたやうな形でありましたが、段々価値が出て参りまして、樺太に旅行せらるゝ人は、国境に達する迄約七、八里の間演習林の中を抜けて行くといふやうな状態になつたのであります。

こんなことで非常に眼がつきますし、整理問題が起りまして眞野総長はこれに対して非常に苦心せられまして、盛んに抗弁せられた結果、今日迄無事持つて来た訳であります。樺太の演習林が一番農学部としては今都合がよくなつて居るのであります、面積から

云へば、朝鮮の演習林の方が大きいのであります。林相が非常に悪いのでありますから、結局朝鮮の方は貰ふときには緑化する樹を植ゑるといふことが目的であつたのであります。それには非常に金が要る——一方収入が挙らないのに金が要るといふので、非常に本部でも困られたやうでありまして結局農学部が出来、演習林を渡された当時は農学部としても金の出途がなく困つて居りましたが今日では製紙業が盛んになつた為樺太演習林より収入をあげることになりました。

樺太演習林は移管当時二万町歩の木材の価格は其蓄積約一千万石以上でありまして、先づ一千五百万石としてその価格が一万五千元であつたのであります。詰まり一石一厘で評価されたのであります。(笑声)それが今日では安くても一石五十銭になつたので約五百倍に騰貴した訳であります。それでですから大学に対して非常な財源を渡した訳で、樺太庁では今日返して貰ひたいと云つて居るのであります。演習林の経営も実はもう少し金をかければ、もつと儲けがあるのであるが、今伐採して居る十四、五万石を市場に出しますには年に七、八十万円の経費をかけなければならぬのであります。七八十万円かければ一割で七万円、二割で十四万円の利益を得ますけれども、場合によつては損をすることもある。樺太の木材は価格の変動が激しいので半分に下ることがあるのであります。それでこのことは実行は危険でありますから只今は立木の処分をして居るや

うな訳であります。

併し追々は大学としても経費を投じまして、理想的に加工をして、一步進んで完全に経営をやるといふことでなければならぬと思ひます。それでなければ世間では大学は唯立木を売つて儲けて居るといふやうな非難的になるのであります。今後積極的経営に進むに付ては多大の経費がかかる。その経費を大学が出すことが出来、儲けを大きくするといふことになると、益益設備を充実することが出来ると思ひますからこゝ暫く経営資本を蓄積する為の工作をやつて居るのであります。私が演習林長を辞めました当時から王子製紙会社と年期を結びまして立木払下を致しまして今日迄無事に十年間の年期が終了したのであります。

今年又新しく片山教授が演習林長として、更に又継続せらるゝことになつたのであります。先づ樺太の演習林の収入を以て他の演習林を賄つて行くといふ状態であり、図們江の沿岸の北鮮演習林（咸鏡北道茂山郡所在）は眞野総長の置土産でありまして、大正十五年大学に移管されたのであります。この演習林の譲受に付ては、眞野総長は多年粘り強く尽力せられまして、五千町歩……大学としてはもう少し大きく申出たのであります。これ位にししか成功しなかつたのであります。

近頃北鮮開発——殊に羅津とか雄基とか清津とかの港湾が完備致しまして、御承知の通り新聞に出て居りますやうに三井で経営す

る茂山の鉱山等の關係上将来非常に發展する見込があるのであります。これらは眞野総長が非常に骨を折られたのであります。

眞野総長は非常に山林のことに熱心でありまして、演習林には大抵足跡を印せられたのであります。殊に昆虫の採集に付ては一家を為して居られますが、大学の基本財産たる演習林の設定に付ても非常にお骨折りになつた訳でありまして、樺太演習林、北鮮演習林の如きは眞野総長が最も尽力せられたのであります。今日の状況を御覧になつたら非常に御満足になることと思ひます。大体そんな風で演習林として将来やるべき仕事は沢山残つて居りますけれども、先づ他の厄介にならず、或る程度迄發展をし得るといふことが今日の現状であります。これ位で御免を蒙ります。（拍手）

満田教授

今のお話を承けまして現演習林長の片山教授にお話を願ひたいと思ひます。（拍手）片山君どうぞ。

片山教授

演習林設置当時の模様其の後の沿革及び現状に就いては、以前に永らく演習林長をして居られた植村教授から先刻詳細なお話がありましたから特に私から申上げる程のものはありません。只補充的に一二付け加へることに致します。

演習林設置後其の区域面積は多少異動して居りますが先づ大差なく只南鮮演習林の一部約二千余町歩を慶尚南道の模範林に供する為

大正の末期に総督府に返還したことがある位です。

そうして現在の演習林は樺太に約二万町歩、台湾に約二千町歩、朝鮮咸鏡北道に約四千六百町歩、慶尚南道に約一万七千町歩、福岡市附近粕屋郡に約三百七十町歩、早良郡に約五十町歩、合計約四万四千町歩程ありまして、職員の数も漸次増加し今日では演習林長以下傭人迄も通算しますと約六十人に達し、学生の指導に、學術の研究に、又経営上に於ける各種の実地調査に使用せられ、貴重な文献も発表されて居ります。

又演習林経営の結果得らるゝ収入も最近は著るしく増加し其の一部は大学の基金に繰り入れられて、今後に於ける設備の完成、事業「發展の準備に当られつゝあります。以上の如く演習林は歴代の演習林長を始め職員一同の努力により頗る順調の發達を成して来て居りますが、東大、北大の演習林に較ぶれば経営の歴史が新らしい為未だ其の規模は僅かに何分の一に過ぎません。

従つて今後為すべき研究及び業務は沢山残つて居りますが、今迄に築き上げられた基礎と潜勢力により将来益々發展することは疑ひない所であります。

演習林の経営は学生の指導、學術の研究が主なもので収入では勿論ありませんが御参考迄に最近演習林平均一ケ年の収支を申上げれば東大は収入約八十六万円支出六十九万円、北大は収入約四十万円支出約二十八万円、九大は特別な収入を加へても収入は東大の約

四分一、支出は東大の約八分の一位に過ぎません。

最後に九大演習林の悩みの一つに就いて申上げます。即ち他の大學では何れも内地或は北海道に数千町歩乃至数万町歩の演習林を有して居りますが、九大では僅かに約四百町歩ある計りで然も其の大部分は貧弱な松林と保安林でありまして、最も多く学生の指導に、學術の研究及試験に使はれる演習林が甚だ少いことは非常に不便で困つてゐる点であります。(拍手)

エビローグ

満田教授

現演習林長の片山教授、農場長の丹下教授には演習林並に農場の将来に付て色々御抱負もあらうと思ひますが、時間も大分進んで居るやうでありますから、次の『本学の将来』といふ処に於て、若し時間があつたら話して頂くこととして次に移つて頂きたいと思ひます(拍手)。

希望にもゆる若き法文学部

座長……大島教授

武藤部長

次はプログラムに依ると法文学部史となつてをります。甚だ恐縮で御座ぬますが大島先生に座長をお願い致します。(拍手)

時間も大分経つてをりますので、誠に申訳御座ぬませんがアツサ

リとお願ひ致します。

大島教授

僭越でありますが御指図によつて法文学部に關することを私から申し上げます。先程から医学部、工学部、農学部の方々から色々有難い有益な面白い御話を承はりまして非常に感銘いたしました。これならば徹夜して御話を伺つても差支ないと私は考へたのであります。(笑聲拍手) 満田農学部長の御心遣ひによつて、寧ろ農学部のお話の短きに過ぎたことを非常に残念に存ずる次第であります。

只今武藤新聞部長から御話がありましたやうに、法文学部は創立日尚浅く、先程久保教授は農学部は未成年者であると云はれましたが、法文学部はとつて十二になりますので、恰度尋常小学四年生に當る訳であります。それで武藤部長からお断りになるまでもなく、長い御話は出来ない次第であります。(笑聲) 一体法文学部は、何ういふ学部であるかといふとその研究する学問の性質から申しまして、他の先輩各学部と趣きを異にした、いはゞ一種毛色の變つた学部であるといふことは皆様の御承知の通りであります。従つて法文学部は臨海実験所も持ちませんし植村さんのお話のやうな尪大な演習林も持つて居りません。百万円の寄附を受けた噂も一向聞かないやうであります。(笑聲) 洵に見栄のしない鉄筋コンクリートのチョツと煙草専売局とでも(笑聲) 思はれるやうな建物の内に精巧な機械もなく、顕微鏡もありませんし、モルモツトも居りません。唯人

間の頭と本だけが詰まつて居るといふ学部であります。

その持つてゐるものから申しまして極めて貧弱でありますから、先程から皆様のお話を承りますと、医学部、工学部、農学部それ／＼立派な歴史を有つて居られまして御話を承つて居ります中に、成程これでこそ九州帝国大学であるといふ矜持の念がおのづから起つてまゐりますのに引かへ法文学部はこれぞと取立て、申上げるやうな学部自身の歴史を有ちませんので御清聴を汚しますのも甚だ恐縮に存ずる次第であります。

法文学部の創立に就て、その古い由来に就ては私は何も存じません。唯眞野総長の時代に、即ち大正十三年の九月二十五日に法文学部創立の官制が發布されまして、越えて十四年の四月から授業が開始されたのであります。

私はこゝへ参ります迄は第七高等学校造士館に教鞭を執つて居りまして、中橋文相の時代から、九州帝大に追々法文学部が開かれるといふやうな噂は聴いて居りましたが、私が交渉を受けましたのは大正十一年の三月頃であつたかと記憶して居ります。先程お話もありましたが、私は石原さんのやうに強つてお断りは致しません。(笑聲) 喜んでお引受け致しました。

五月の半ばにはもう在外研究員として日本を出て、まづ独逸に参りまして、極めて短期間フランスと英国に滞留いたしました米國を



経て大正十三年の十月に帰朝いたしました。

私が帰ります前に法文学部創立の官制が發布されて、間もなく創立委員たる当時の東京帝国大学法学部教授法学部長美濃部達吉博士が、九州帝国大学法文学部教授を兼任せられることになりましたと同時に法文学部長事務取扱ひに補せられた次第であります。越て大正十四年の四月二十日に授業開始の式が行はれたことを記憶して居ります。

話が前に戻りますが、先程申しました理由によつて、法文学部内では、他の学部のように大先輩方の逸事などを御話する材料がありませんから、私たち自身が在外研究員となつてから洋行して帰るまでの間に遭遇したことを一つ二つお耳に入れたいと存じます。

独逸へ向けて日本を立ちましたとき、船が門司で一泊しましたが同行の東季彦、山之内一郎両君と大学をたづねて総長に御挨拶をしようといふことになりまして、朝船が門司につくと早速下りて博多行の切符を求めて出掛けました。私は当時農学部長をして居られた本田幸介先生には、同県の大先輩として学生の時代から一方ならぬ御世話になつて居りますので、博多駅に着くとすぐ両君を帯同して農学部に先生をおたづねいたしましたらば、先生は非常に喜ばれて今日はこれから本部で評議会があるから、すぐ出掛けなければならぬ、時間はもう過ぎてゐる、眞野総長には会つたかといはれましたので、まだですと御答へしましたらば、では、一緒に行かうとい

つて、当時医学部の構内にあつた本部まで私達を案内して下さいました、その頃は電車が『箱崎』までしか来てゐなかつたので、農学部から電車まで歩くのに物の三十分もかゝつたやうに覚えて居ります。本部につくともう会議は始まつてゐましたが、先生はそれでも構はず、丁度よい時だといつて、総長を始め評議員の方々に紹介して下さいましたので、私たちは一寸御挨拶をしてすぐ引退りました。

大学の本部は御承知の通り、法文学部ができてから、一時法文学部に移るまでは、そこに在つたのでありますが、私達は始めて御たづねして、何よりも先づそのお粗末なのに驚かされた次第です。それから両君に別かれて、私は本田先生の鳥飼の御自宅をおたづねしましたら、東大総長の古在由直先生が東京から見えて居られました。やがて本田先生も帰られて九大に関する四方八方の話を承はりました。農学部の方々はよく御存知ですが、本田先生の例の皮肉な調子で、これまではよかつたが、法文学部ができると口の達者な人間たちが集まるから、これから九州大学も六ヶ敷くなるぞといつて私をからかつて愉快に笑はれたことをよく覚えて居ります。その時は鳥飼は一面の菜種畑でまことに淋しい処でありました。

それから今一つは伯林に、いつてからのことでありますが、今でもよく、時々君等が独逸にゐた時は丁度インフレ時代であつたから法文学部の連中は余程儲かつたであらうと羨まれることがありますから、それに就いて一つ思ひ出を申し上げます。成程一面から見

すとマルクが非常に安かつた為め昔が今ならば私どもでは到底買ふことのできない書物等を沢山手に入れることが出来ましたが、何うもコーヒーを一杯飲みますと何万マルクも払はなければならぬやうな時代でありますから(笑声)さう儲かる訳のものではありません。

本が安いからと云つて買つてゐる中に、もうお金がなくなりまして大きに貧乏した人が沢山あります。それに、本を買へば、荷造費が要る、運送費がかゝる、保険をつけなければならぬ、日本に着けば震災後のことですら、保管料を出さなければならぬ、家をもつと本箱が必要になるといふわけで、本の為めには随分苦勞をいたしました、それだけ苦勞をしても簡単に学者にはなれませぬ、結局損になつたかも知れませぬ。どうぞ御察しを願ひます。(笑声)

法文学部創立当時の思ひ出は、それまでにいたしまして、先程申上げました法文学部は一体何ういふ学部であるかといふこと、聯関して、法文学部の組織又は精神ともいふべきものに就いて一言いたします。

法文学部といふ処は、御承知の通り法学士、文学士、経済学士といふ三通りの学士を出す処であります。この点におきましても他の先輩学部と非常に趣きを異にいたしますが、実はこゝに法文学部の一つの特色がありますので、それについて一寸お話申上げたいと思ひます。法学士、文学士、経済学士といふ三通りの学士を出す処だとすると、それは恐らく創立の当時、金がなかつた為め已むを得ず

東京帝国大学や京都帝国大学に於ける各学部即ち法学部、文学部、経済学部の三つの学部を小規模にして一つに寄せ集めた所謂寄せ世帯であらうといふ風に、やゝもすれば考へられやすいのであります。それが法文学部創立の精神に違ふのであります。法文学部は決して東京や京都に於ける各学部を小さくして一つの鉄筋コンクリートの中に集めたといふやうなものでなく、始めから一つの統一体として、独自の存在の意義と抱負を以て生れて来たものであるといふこと——これは判りきつたことでありますけれども、まだなか／＼徹底しない処があるやうに思ひますので、その点を強調したいと思ふのであります。

処が實際は矢張り明治維新以来の大学の伝統がありまして、九州帝大に法文学部が出来たからといつて、直にそれによつて九州独特の法文学部の精神を實現し發展して行くといふことはなか／＼容易ではありません。早い話がこの学部が創設されて、愈々開学授業開始といふことになりました前に襟章は何ういふ風にしたらよからうかといふことが問題になりました、眞野総長と美濃部学部長事務取扱と色々御相談になりました、私も学部長事務取扱代理として、御相談に預りました。

結局、法文学部の『法文』の英訳 Law and Letters の Law と Letters も共に L で始まつてゐるから L の字を二つ組み合せて一つの L の字を作つて、これを法文学部の学生全体の襟章として、それ

で法文学部の統一体たることを表すことにしようといふことに定つたのであります。

ところが矢張り何うも東京や京都の従来の帝国大学の伝統がぬけませんのでいつのまにか襟章が『J』『L』『E』と三つの文字に分れるやうになつた訳であります。初めの間は襟章が違ふと云つて、やかましく小言を申したのであります。何うしてもそれだけは止める訳にいきませんので、もう今日は学部の方でもそれを認めたことになつて居ります。

実際に於ては、これは本来法文学部が生れ出た、その独自の意義に反する訳ではありませんけれども、併し解釈のしやうによつては、統一体としての法文学部の学生ではあるが卒業すればそれ／＼法学士、文学士、経済学士の三通りに分かれるのでありますから、襟章はその点を表してあるので、そのために、法文学部の統一体としての精神が失はれることはないとも考へられますので、そのまゝになつてゐる次第であります。

先程から申しますやうに、法文学部は創立以来日尚ほ浅く、今日何等誇るに足る歴史も持ちませぬけれども、九州帝国大学に法文学部なるものが生れ出た本来の使命は私たちの尊敬する東京帝国大学にも京都帝国大学にも見出すことの出来ない独自の存在の意義と理想とを實現することにあるのであります。その精神を以て今日に及んでゐる次第であります。それで何うぞ先輩の各学部にかかれま

しては法文学部の精神のある処、意義の存す処を、将来に御期待になつて御誘掖下さるやうにお願いいたします。

色々申上げたいことはありますけれども、余り徹夜するやうなこともよくないと考へますから私はこれで御免を蒙ります。私の話の足りない処は又四宮さん豊田さん鹿子木さんたちから補つて頂きたいと思ひます。(拍手)

では四宮さんどうぞ。(拍手)  
四宮教授

法文学部に就いては、創立の日も浅いのでありますし、又只今大島教授から主要なる点について詳しいお話がありましたので、元来お話致す事柄も少い処ですから、更に蛇足を加ふべきこともないやうに思はれるのであります。

只今お話のありました法経文の統一体、即ち法文一体の精神に就いてであります。この点に付ては恰度大正十一年の後半期から十二年の前半にかけて十数名、近く創設せらる可き法文学部の留學生が伯林に集まつて居つたのであります。その当時、時折留學生の会合を致し、又文科関係のものは話合ふ機会が自然多くあつたのであります。その折に屢々出た話でありました。

この『法文一体』の精神は法文学部創立の精神でありまして創立以来今日に一貫して継続して来てゐるのであります。此の精神は法文学部の特色として法文学部の魂として色々の障碍の除去せられる

と共に漸次強化されて行くことゝ思ふのであります。又強力ならしめなければならぬことと思つてゐるのであります。

法文学部の卒業生は、その専攻するところに従つて法学士、経済学士、文学士に分かれるのでありますが、その意味するところは既設大学のそれ等とは全く異つてゐると思ふのであります。法文学部の出身者は實質に於ては何れも等しく法文学士でありますが、たゞ法学に経済学に或は哲史文の学科に研学の重心を置いたかに依つて称号を異にしてゐるに止まるのであります。法文学部は法文一体を精神として教養の新たなる典型創造をその使命としてゐると思ふのであります。

伯林に集まつて居ります際に、この法文一体の精神のほかに、今一つ出て居りました話は、日本の大学にもレールフライハイイトとレールフライハイイトの行はれるやうにしたいものであるといふ事でありました。

法文学部の、尠くも文科関係の学科担任者の間にはこの自由を確保したいものである。既設大学に於けるやうに、或る学科の講座を担当して居る者には、そこに繩張りの如きものがあつて他の学科の講義が出来ないといふことなく、例へば社会学を研究するには哲学倫理学など姉妹学科の研究に這入らねばならないのであるが、同時に社会学の担任者はそれぞれの学科主任と学課の配合などを談合諒解の上、哲学概論倫理学などの講義も出来るやうにしたいものである。

他のそれ／＼の学科担任者に於いても同様に、かやうな『教授の自由』といふことを法文学部の内部に、尠くも文科の内部に於ては確立したいものであると云ふことを話合つて居つたのであります。創立以来文科の大部分の者の間には、その諒解が存続して来て居るものと思つてゐるのであります、けれど実際には余り行はれてゐないのであります。

今一つはレールフライハイイト、即ち学生の修学の自由であります。従つて『転学の自由』であります。これに就いては恰度その頃新に出来た並に新に出来る筈の大学の法文学部相互の間に協定して、転学の自由を申し合せ、それを出発点として進まうではないかといふ話が出てゐたのでありますけれど、帰りましてからこの点に付ては、その氣運を起さうとするこの緒にも就き得ないのであります。

これには日本の大学の制度の上に大なる障壁があるのであります。昔の日本の大学には却つてレールフライハイイトがあつたのではない。中世の日本の大学は高野山、比叡山でありませう。近世に徳川時代に入りましては諸所に鴻儒碩学が門戸を張つて居つたのであります。当時の大学であると言ひ得られませう。学徒は笈を負ふて碩儒の門を叩いて歩き深く感激を覚えた所に止まつて研究を進め、其研究或段階に達せば他の特色ある学者の所へ移つて即ち他の大学へ転じて研究し、自己の理解を深める事が出来たのであります。日

蓮、親鸞などは高野、比叡の大学に学んだのでありますが、高野から比叡へ、比叡から高野へ転ずることも自由であったのでありませう。

斯う考へて来れば日本の大学には却て『転学の自由』があつたのではないか。此の点では現今の大学は却て退化して来てゐるのではないか、などと放言し合つたことが思ひ出されるのであります。

それでは、時間の点もありますので伯林の頃の思ひ出の一つを御話するに止めたく思ふのであります。(拍手)

大島教授

(四宮教授に) どうも有難う御座りました。次に豊田さん、何かどうぞ。(拍手)

豊田教授

別に纏まつた話でもありません、又医学部の話に戻つて恐縮ですが私は恰度医学部の創立——と云ひましても、福岡医科大学の創立の当時関係があつた訳であります。

(一同驚いた顔)

石原先生はまだドイツに御留学中のこと、思ひます。私は明治三十七年の春久留米の明善校を卒業したのでありますが、卒業前から体を悪くし、その頃外来患者として大学で診察を願つたことがあります。(笑声) 大へん御丁寧な予診から始まりまして、熊谷先生の御診断を受けたのを覚えて居ります。ともかく古くから大学に関係があ

つたことを申し上げて置きます。今晚の集會が非常に有意義だつたと感じたのは私一人ではないと思ひます。創立二十五周年回顧の會としては今時限りでありませうが今後も各学部関係者の座談會を開部あたりの主催で、せめて年に一回位開いて戴くことができれば極めて有益であらうと思ひます。會費は勿論自弁で結構です。(拍手)

大島教授

次に干潟さん、何かどうぞ。(拍手)

干潟教授

もう皆さんが何でも彼でもすつかり話されて了つたので私の申し上げる部分はありません。(笑声)

(編輯者曰く、実はもう午後十一時に垂んとしてゐたので、われわれを助けて下さつたのです。)

附属図書館開設のころ

武藤部長

次がわが附属図書館初代の館長であられた長教授に創立当時の思ひ出を伺ひたいと思ひます。(拍手)

長教授

図書館開創当時に関係しました私の、昔話を致してみます。大正十四年二月中旬のこと、私をはじめて建築中の図書館を見た時には、之はどうにも手がつけられないと云ふ感のみでありました。何処か

ら何処までも、全く図書館向きでは無く、正面から観ると映画館のやうでした。

閲覧室は四つに分れ、紙牌室は真暗く、事務室は二三人位しか坐れず、書庫は無駄な空間が多く、少くも三十万巻の書籍と、少くも廿人の事務員とを、何処にも入れやうがありませんでした。四閲覧室に四人の出納手を配置すると云ふ愚は考へられませんでした。採光から、出入扉から、新聞室の無い事から、便所の不足から、リフトの不完全から、何から何まで、私には館長の御役がひきうけられさうにないと感じてゐました。

一層のこと、之を法文の研究室に改造充當して、別に図書館的図書館を建てゝほしいと希望して居ました。然しそんな事も出来ず。辛うじて裏に事務室を建てることになりました、裏より外には地面がないのでした。

処が初から不得已裏に建たので、書庫が閲覧室と事務室との間にはさまつて、管理上の大困難がありそれで正門内の現在の空地に大講堂の建つ計画の時、建築委員であつたから私は、之を利用して北面図書館の、南面転向を企てたのでありましたが、之は夢のやうに過ぎ去りました。何とかと、壁を開くとか、入口を改めるとか、補い繕ひして、図書館開きをする間に、私の任期が満ちました。この任期設定は、事の当否は勿論別として、より技術的からより事務的に変遷した歴史事実でありました。

……◇……

法文学部開創以前から医学部内に図書館があり、従つて各学部分立図書館説も、一時盛んでありましたが——図書館創立後も、それは法文の図書館也と云ふ高論が、我が学部内某氏に依つて叫ばれました——総長眞野先生はあくまで九大の図書館であると云ふ考へで、それが現行規程の中の図書館商議委員会組織に反映してゐます。然し斯の方面の迂曲の昔話は、こゝに省略して置く方が賢明でありませう。

旧来の紙牌(カード)は全国型でなく、インテルナショナルでもありませんでしたので、改めると同時に、箱も改めるとか、規程を作るとか、分掌細則を定めるとか、分類を法文学部を主題として定めるとか、他学部の批難が出る、紙牌の記入形式を定めるラベル、蔵書印、台帳記号、日附印、秘印頁号を考出しました。一番困つたのは紙牌の略語を一定することでありました。その間会計を中野葛二君に頼み、司書官を迎へ、主任司書を迎へますなど、多悩の間に自分で紙牌記入を度々やつたのは、楽しみでありました。昔京大でやつてゐた日を思出しながら。それから目録編纂にもとりかゝつてゐましたが、追々に図書館にも古色が出て来るとか、庭の樹も植ゑられました。大体形が整ふやうになつて、私は明治四十年以来関係してゐた図書館と云ふものから、所謂全く解放されました。

開創當時を回顧しますと、よくも今日の完備が生じたものと思は

れます。全く館関係諸彦の努力の結果に外ならないのです。唯建物だけは、随分奇妙な依然たるものであります。(拍手)

学生課関係

学生課の沿革と学友会を語る

学生監より学生主事へ

武藤部長

これから学生課の諸先生のお話を承はりたいと存じます。(拍手)

岡部主事

先程から私共眼の覚めるやうな面白いお話を聞きまして、新聞部の今夕のお催しに対して感謝して居る次第であります。歴史と反対でありまして、新しくなるほど段々ニスヴァリユウが少くなりまして昔の時代の話が豊富になり、新しくなる程話が少くなります。

学生監といふのは、歴史は非常に古いのでありますが、財産の方は先程大島教授のお話の通り全然ない無資産階級であります。唯歴史は非常に古いのでありまして、一覽にあります通り学生監としては最初に板垣教授がやつて居られまして、同教授は明治四十四年四月一日より大正元年九月三十日迄続いて職をとつて居られました、其の間に事務室の坂根様が三ヶ月程共に職を取つて居られます、其から大正三年九月に板垣教授に代りて医学部の名誉教授中山平次郎先生が大正十一年五月十日までやつて居られ其から今は故人になら

れた工学部の河村幹雄先生が中山先生の後を承けて大正十四年四月廿七日までやられ其から暫時空きになつて居りて法文の松濤教授が大正十四年十月卅日から同十五年十月廿九日まで勤められそれから各学部から一人宛出られまして、医学部から板垣先生、工学部から生源寺先生、農学部から木村先生、法文学部から大森先生が出られまして昭和二年六月十六日迄やつて居られます。

恰度その二、三年前から学聯問題が起りまして、色々当大学も其余波で中々多忙の様でありました。初めの中は四人で学部を分担して大きいことは相談し合ふがよからうといふことでありましたが、却々事件が頻発致しまして、初めは一つの仕事を四分の一宛やればよい訳でありましたが、却々四分の一どころではなく、大へん忙しいので各々本職を持つて居りますので手が及び兼ねるといふので、丁度大工原総長の当時でありましたが、何んとかして貰ひたいといふやうな話があつたさうであります。その結果でしか東京の総長古在先生がその下に居つた僕の友人に九州の方に行くものは居らぬか、学生の取締をやるやうな適任者は居らぬかといふことで友人から私に行かんかといふ話があつた。

私は何うも自信がありませんが兎に角東京へ出て来いといふので大工原先生と東京ステーションホテルで会ひまして、色々状況を聞かされまして肚を決めてお受けすることになり、一旦新潟へ帰りまして校長の御許しを得てこちらへ来たのであります。

丁度そのときに北海道の帝国大学に学生監の会議がありました、生源寺先生が九大から出席せられますので学校から私の方に電報が参りまして北海道に行けとの事で赴任前に札幌へ参りまして各帝大の学生監や先輩に会いまして、色々各大学の状況等を聴いて参りまして、それからズツとこうやつて居ります。

その間に暫らくの間進藤教授に、昭和二年十一月十日から昭和三年十月三十日迄お手伝ひを御願ひし医学部の方のことを主としてやつて頂きました。初めの間は補職といふやうな形でありましたが、丁度水野鍊太郎さんが文部大臣のときと思ひますが、補職ではなくて一つの官制を布かうといふので、それがへんな官制です、書記官といふことになりまして、昭和二年十二月二十二日から三年の十月三十日迄書記官でありましたが、書記官は面白くない、何んだか書記のやうで面白くないといふので、その頃丁度勝田主計さんが文部大臣でありましたが、学生監の監の字は監獄の親方のやうで何うも響きが悪いから『学生主事』にしようといふことで、自ら『学生主事』といふ名をつけられたさうであります。それから今日迄学生主事でやつて来て居ります。

大体さういふ事情で学生監の仕事は板垣先生の方が古いのであります。私が参りました当時は思想問題等で困りましたが最近皆皆さんの御尽力によりまして大へん都合よく行つて居ります。今後は又追々と学生の福利施設とかさういふ方面に向つて皆さんの御諒解

を得てやつて行きたいと思ふて居ります。

それから一寸思出したのですが、これは確な記録は残つて居りませんが、工学部に 天皇陛下が大正十五年十一月 行幸になりました際、板垣先生は御承知だと思ひますが、学友会に一千円が御下賜になつたと思ひます。前田主事が保管して居ります。之が利息がつかまして千七、八百円になつて居ると思ひますが、極めて意義のある事には使はないことにして居りますが、私が大森教授から引継ぎましてから、さういふ方針で保管して居りましたが、唯一回だけ柔剣道場が出来ました際、神様とお祀りする幕とか色々な道具を買ふため四十円か、五十円か、これは意義深いことであるといふので一回だけ使つて居ります。

それから先程工学部の本館が焼けまして、今日の本部の建物に付てお話がありました。あの中は貴賓室は相当綺麗になつて居ります。他の大学に引けをとらないやうに立派になつて居ります。その装飾は松浦総長が居られるときに出来たのであります。其の費用は何でも古河さんから将来本部の貴賓室の装飾の費用として寄附された金が五千元あつてそのお金で装飾設備をしたのであります。そのときに焼け残つた石材等は、工学部のテニスコートと建物の間に沢山積んであつて、非常に美観を害して居りましたが、それを利用してプールの外廓の囲ひが出来ましたが、要するに本部は財産がなく、皆買ひ物はかり云はゞ落ちこぼれを頂戴して辛ふじて生きて居



るといふ風であります。時間がありませんので、簡単にそれだけ。

(拍手)

武藤部長

色々とお難うございました。どうも時間が御座りませんでまことにお気の毒でございます。次に校友会に就いて前田先生のお話を承はりたいと存じます。(拍手)

校友会に就て

前田主事

校友会の沿革及びその内容等に付ては、新聞に詳しく出るさうですから別に申し上げません。唯大体に就いて申しますと、明治四十三年に工科が出来ると同時に九州帝国大学となつた。その頃迄は運動会と云つたやうであります。それが全体の校友会となりましたのが丁度法文学部が出来たとき、即ち大正十三年でございます。その後には校友会といふことになつたのであります。

校友会関係の事業は、体育が主で無論正科ではありません、しかし学生々活から見れば非常に重大なものであります。外国殊にアメリカの大学などではフットボールの競技会には正科を欠席させると云つた位な力の入れ方です。日本は無論事情が違ひますから直ちに之に倣ふことは出来ませんが、しかし外国では如何に体育に重きを置いてゐるかが判るのであります、そう云つた意味から校友会の事

業は学生々活にとつては極めて重要なのであります。

最近には学生の福利施設といふことに、私共は力を注いで居ります。その一つの例を申し上げますと、最近に『山の家』といふ学生の修養と療養との両方面を兼ねたものを建てることになつて居ります。これは満田先生、岡部先生の非常な御尽力によつて出来ることになつて居ります。多分来年の夏迄に間に合ふかと考へて居りますが、約一万一千円の予算で、百二坪ばかりの建物を飯田高原に建設中であります。それからもう一つ各大学とも学生の為に娯楽修養或ひは運動といふやうな方面の施設として学生会館といふものを計画して居りますが、これは最近学生が非常に希望して居りますので、出来ればさういふこともして見たいと思つて居ります、尤もそれには非常な資金が要りますので、何分諸先生の御尽力をお願ひ致しまして、学生の希望なり期待なりに副ひたいと思つてゐます。(拍手)

本学の将来

武藤部長

色々お話を承はりまして有難うございました。実はお車を用意して置きましたので、その中には揃ふことゝ存じます、その間に最後の項目に就いてお話を承はりたいと存じます。この後に残つて居ります『本学の将来』といふのは漠然とした題目でございますが、大学の本質乃至は諸先生方の九大御在職者として九大に対する『ゼル

『ブスト・ベトラハトウシク』乃至『ゼルブスト・ベハウプトウシク』といふやうなこと——これらをも含めて、この際諸先生にお示し願ひたいのでございます。では先づ鹿子木先生にお願ひ致しましてそれより各学部部長先生方のお話に移りたいと存じます。(拍手)

鹿子木教授

今夕御出席の諸先生の中で恐らく私は一番若輩新参者であると思ふのであります。従つてこの創立記念座談会に出席致しましても彼此れ申上げる資格はないと思ひ、唯傍観者といふ積りで参つた次第であります。然るに拙ならずも御指名を頂きましたが何を申上げていゝのでありますか実は狼狽へて居る次第であります。

今夕は先輩学部諸先生の、本学の由来する処極めて深く、又本学今日の隆盛をお導きなされました御苦心の数々を承はりまして、洵に温故の感深きを思ひますと同時に、感恩の念禁じ得ざるものがあるのであります。唯本学殊に法文学部の将来といふことを考へますと、私共現在法文学部に籍を置きます者と致しましては、これまでの諸先生の御努力を無にせざるべく、非常な覚悟、非常な反省發憤を必要とするのではないかと思ふ次第であります。

若いものは兎角夢見がちでございます。私共は先程も申しますやうに、本夕御列席の諸先生の中に於ては、年は或は一番若くないかも知れませんが大学の人としては一番若いのであります。その意味からも兎角夢見がちでございますから少しく夢をお話申上

げて見たいと思ふのであります。

大学令の第一条を拝見致しますと『大学は国家に須要なる學術の理論及び応用を教授し並にその濫興を攻究するを以て目的とし兼て人格の陶冶及び国家思想の涵養に留意すべきものとす』とあるのであります。この大学令第一条を深く玩味致しますと、他の各種各様の学校令とは非常に意義異なるものがあると思ふのであります。それは即ち『国家』といふことに關聯を与へ居るといふ点であります。更に一步深く考へて見ますと、斯の如く大学の設立の目的を國家に關聯せしむる所以のものは、大学の使命の存する処が、國家の指導に任ずる人物を養成するといふことにあると思ふのであります。が、今日大学に籍を置きます私共と致しまして、反省すべき点は何処にあるかと申しますと、実にこの点ではないかと思ふのであります。果して今日私共は日本國家の指導的人物を、社會國家に送り出しつつあるか、果して吾々は十分に自覺を以て、日本國家を指導する人物を送り出しつつあるのであるか、私共の日常携つて居ります仕事を見ますと余りに所謂専門に走りまして、何んとはなしに大学の専門學校化といふやうな感じを持つことがないのでないのではありません。

で医学部、工学部、農学部、法文学部と、孰れもそれ〴〵學問の範圍、領域といふものは限られてあるのであります。が併しそれらの範圍に於て日本國家の指導者を作るといふことが、大学の使命で

なければならぬのであります。而してその使命を果します為には、先程誰か話もあつたのであります。基礎の学問に力点を措かなければならぬと信ずるのであります。この点が各学部を通じて閉却されがちではないか……その時々々の社会の風潮に負けまして、その時々々の社会の風潮に間に合ふ……社会の風潮と申しますか、社会の要求……需用に応せんとするやうな傾きがないではなからうか。

これを私共の法文学部に就いて見ましても、既に大島、四宮両先生から御指摘がありましたやうに、将来、法文学部といふものは、東京、京都大学の旧套を脱して、新興日本国家の指導者に相適しい学問をやる処として作られたのであります。実際に於ては法文学部の内容といふものが法科、文科、経済科といふやうに分れがちなのであります。而してそれ々の専門のみで終始せられるといふやうな傾きが相当今日では強いのであります。更に一步を進めまして私共の直接関係して居ります文科方面に至りますと、文科内部で又哲学とか史学とかいふ風に分れまして、各々の小さい専門といふものばかりをやればそれでもいゝのである——斯ういふ風な傾きが、正直に申しますとないではありません。さうなると極狭い範囲内に於ては相当詳しく深く修めた卒業者を世の中に送り出すことが出来るが、併し元々基礎的なもの従つて一般的なものの、教養に欠けて居りますから、この種の専門の教養といふものは、深いやうで実は徹底した深さに達することが出来ず、従つて全体を把握す

る力を欠ぐし——従つて限られた範囲内に於ても、新しい日本国家の指導者が出来ないと云ふ結果を来たすのではないかと私は恐れるのであります。

現に今日、日本の国家を指導しつゝある人々は、必ずしも大学——殊に帝国大学出身者でないといふやうな事実を見ますと、之は大学——殊に帝国大学は果してその本来の使命といふものを達成しつゝあるのであるかどうかといふ疑を、往々にして抱くのであります。この点に付きまして他日の機会に先輩先生方のお教へを受けることが出来れば、洵に幸福と思ふて居る次第であります。

更に日本の国家が帝国大学を、この九州の地にお置きになりましたのは、相当に地域的關係があるといふことは申す迄もないと存するのであります。さう致しまして帝国大学の位置——帝国大学をこの九州の地にお置きになりましたのは、この地元である福岡の文化を高めるばかりでなく、一般に九州の文化——学問を高める為であらうと考へるのであります。

この点に付て十分御努力があつて居ることと思ふのであります。浅薄な私の拝見致します処では、どうもそれ程十分でないやうに考へられるのであります。現に進藤先生がお話になりましたやうに、九州帝国大学がぢきちきの地元である箱崎の町とどれ位の關係があるか——殆んどないのではないかとすら私共は感ずることが多々あるのであります。

更に進みまして近接して居ります福岡市と九州帝国大学との関係といふものが、しつくりいつてゐない。更に進んでは九州一円に、どれだけ九州帝国大学の学問的、文化的權威といふものが及んで居るか、尚多くを希望する余地が、そこにあるのではなからうかと思はれるのであります。それと同時にこの九州の地は、朝鮮、満洲、支那及び南洋の諸島と、比較的隣接して居るのであります。従つて日本国家の尖端的發展の担任者といふものは、当然他の京城とか、台湾とかの帝国大学も無論でありませうけれども、内地の帝国大学では最も世界的日本の進出の指導的地位にあらしむべきであると思ふのであります。この点に付ては小野寺先生、板垣先生等は非常に御尽力なされて居ることを予々拝承して居るのであります。尚將來とも益すこの方面に関心留意すべきことではないかと思ふのであります。その為には矢張り本学の諸先生方が、その専門の如何を問はず、親しく御洞察を下さいましてこれに対して活きた御関心をお持ちになるといふことが、非常に大事ではないかと予々思ふて居る次第であります。

尚色々申上げたいこともございませうけれども、最早一時近くになるやうでありますから……一時は少しなんですが、十二時を過ぎること十分——それこそ大島先生の徹夜になりますから、これで御免蒙ります。(拍手)

閉会の挨拶

武藤部長

ついお話に惹かれてうっかり致してをりましたが最早午前零時半となりました。実は只今の鹿子木先生の御話の後を受けまして、これから各学部将来の御計画を学部長の先生方に承はりたい予定でありましたが、これ以上時を過ぎしては大変で御座りますので、遺憾ながらこれは他日を期する事と致します。御諒承願ひ上げます。本夕は諸先生から長時間に亘りまして貴い御教示乃至御経験談やおなつかしい思ひ出話を承はる事が出来まして、私共後進と致しましては、実に裨益する所が多く御座りました。あつく御礼申し上げます。殊に本夕のお話には、諸先生がこれまで誰にもお洩らしなかつた——謂はゞ門外不出であつた特種が非常に多いのであります。この特種を特にわれわれに御提供下さつた御厚情に対しては、私共全く感佩の外はないのであります。就いて今晚のお話の速記はその全文悉くを紙上に拝載して文書化し、本学創立二十五周年の記念塔として長く保存し以て御厚情の万一にお酬ひ致したいと存じます。

皆様、今晚はまことに有難う御座りました。——たゞ老先生方をこのすつかり冷えこんだ真夜中までお引きとめした罪は全く私に御座ります。どうか幾重にもお許し願ひ上げます。

では、これを持ちまして閉会と致します。(拍手)

(註) 原本に句読点追加。